

ONE

ようこそ、長崎のミュージアムへ

ANSWER

博物館・美術館ガイドブック

THE
MUSEUM
GUIDEBOOK
OF
NAGASAKI



ONE

ようこそ、長崎のミュージアムへ

ANSWER

このまちを形成しているのは、

層のように重なり合う多様な文化。

それは複雑かつ難解でありながらも、

まだ見ぬ世界に受け継がれていく宝なのだろう。

ONE ANSWER

平戸、長崎、島原半島、外海、そして五島列島へ、
海外交流と信仰の歴史を紐解く旅に出る。

無数にある宝と宝をつないで、

ひとつの答えにたどり着く。

海外交流

古代から、海の道を通じて行われてきた海外貿易。
各地の入り江には港が開かれるようになり、まちは活気づく。

やがて訪れた鎖国期にも、

長崎は国際貿易都市として繁栄を極めた。



信仰の足跡

海の道がもたらしたものの、その中には宗教が含まれる。
フランシスコ・ザビエルの布教を機に始まったキリシタン時代。
受洗した人々は、禁教の世が訪れることを知る由もなかった。



キリスト教史に名を残したキーパーソンたち……………12

海の道がもたらした繁栄と信仰

平戸・生月

松浦史料博物館・平戸オランダ商館……………18
平戸市生月町博物館・島の館……………28

異文化と出会ったまち

長崎市

長崎歴史文化博物館……………50
大浦天主堂 キリシタン博物館……………62
長崎県美術館……………74

キリシタンから届くメッセージ

島原半島

有馬キリシタン遺産記念館……………88

キリシタン時代の原風景が残る

長崎市外海地区

長崎市外海歴史民俗資料館……………114

心安らぐ祈りの島

五島列島

五島観光歴史資料館……………130

受け継がれる心

平戸のアゴ漁(平戸市)……………38
サント・ドミンゴ教会跡資料館(長崎市)……………60
長崎くんち(長崎市)……………70
卓袱料理と長崎検番(長崎市)……………72
フェスティビタス ナタリス(南島原市)……………100
具雑煮(島原市)……………102
カンコロ(長崎市外海地区)……………118
堂崎天主堂(五島市)……………138
五島のきびなご(五島列島)……………146

営みに出会う旅

かくれキリシタンの里 春日集落へ(平戸市)……………40
長崎歴史文化博物館 学芸員 深瀬さんと往く 二つの居留地
↳ 出島・唐人屋敷跡・旧外国人居留地↳(長崎市)……………80
潮風を感じながら絶景に出会う
南島原オルレ(南島原市)……………106
ドロ神父の愛が語り継がれる
出津集落をめぐる(長崎市外海地区)……………120
久賀島を訪ねて(五島市)……………140
年表 海外交流の歴史とキリスト教史……………156
エリアマップ……………158

キリスト教史に名を残した

絵 石橋澄

日本のキリスト教はこの人から始まった



フランシスコ・ザビエル

一五〇六—一五五二

イエズス会の創設者の一人。東洋で布教するべく、インド、それに次いで一五四九年に日本の鹿児島に到着。初めて日本にキリスト教の種をまいた。わずか二年ほどの滞在であったが、彼が布教に訪れた鹿児島、平戸、山口、豊後を中心に信仰が芽吹き広がった。ザビエルが去った後もトレスらが布教の努力を続け、やがて大村純忠との縁が長崎のキリスト教史につながっていく。

大村純忠

一五三三—一五八七

有馬晴純の次男として誕生するが、母方の伯父・大村純忠の養子になり十七歳で、大村家第十八代当主を継承。しかしその立場は盤石ではなかった。周辺を敵国に囲まれた領地を富ませるためポルトガル貿易とキリスト教を自領の横瀬浦や長崎に呼び入れ、自身も受洗し日本初のキリシタン大名に。一五八〇年に長崎・茂木をイエズス会に寄進。その二年後には「天正遣欧使節」を長崎からヨーロッパに派遣した。

開港都市・長崎の礎を築いた



豊臣秀吉

一五三七—一五九八

織田信長の死後、権勢を継ぎ天下統一を果たす。最初は信長にないキリスト教に好意的だったが、宣教師の政治への介入、キリシタン大名の勢力増大、長崎が教会領となつていくことなどに疑心をつのらせる。一五八七年に突然発布された「伴天連追放令」によって日本におけるキリスト教の発展に大きくブレーキがかけられた。さらに「サンフェリペ号事件」が引き金となり、一五九七年に二十六聖人が長崎の西坂で処刑される。

秀吉の禁教令をおそれず自領に受け入れた



最初に吹き荒れた禁教の嵐

外海の人々を救った人類愛



ド・ロ神父

一八四〇—一九一四

一八六八年にフティジャン神父に伴われ長崎へ。浦上四番崩れの大迫害の嵐の中、石版印刷の技術を使つて「大浦天主堂版」と呼ばれる教理書を印刷し宣教を続けた。禁教令が解かれた後は一八七九年に外海地区の主任司祭に就任。貧しさに瀕していた外海の人々に驚き「魂とともに肉体も助ける」と私財を投げうった。神父が取り組んだのは教会建設をはじめ授産、福祉、教育、農業振興と多岐にわたる。来日以来四十六年、故郷フランスの土を踏むことなく愛する外海の地に眠る。

禁教と海外貿易をつかさどるエリート官僚



神秘的なカリスマ性で一揆軍を率いる天草四郎

一六二頃—一六三八

キリシタン大名・小西行長の家臣・益田甚兵衛の息子。「差し伸べた手に留まつた鳩がキリシタンの経典が入った卵を産んだ」学ばずして読み書きができた「海の上を歩いた」といった不思議な伝説があり、神童とされた。十代で島原・天草一揆の総大将に推された。一六三七年に起つた一揆は、農民の多くがキリシタンだったこともあり四郎の存在は一揆軍の精神的支柱となった。終結後討ち取られた四郎の首は長崎に運ばれ出島対岸にさらされたという。

長崎奉行

幕府・老中の支配下にある遠国奉行の一つであるが、「長崎」というまちの性質上、他にはない特有の任務があった。大きな一つは「キリシタン取り締まり」と「貿易統制」である。百一十七人（諸説あり）の歴代奉行の中でも竹中重義など初期の奉行は、過酷な拷問で多くのキリシタンを棄教・殉教させた。長崎奉行は他に行政・司法・外交・軍事全般を担い、貿易や異国人の扱いなど様々な分野における高い行政能力が必要とされた。島原・天草一揆をきっかけに奉行は長崎に常駐するようになり、複数任命制で貿易の不正などいかに互いを見張る仕組みがとられた。

「信徒発見」の

奇跡に立ち会った神父



キーパーソンたち

有馬晴信

一五六七—一六二二

島原半島を支配する肥前有馬家の当主。一五八〇年に洗礼を受けキリシタン大名に。秀吉の禁教令によって迫害の嵐が吹き荒れたころ、自領に多くの宣教師やキリスト教の教育施設を受け入れ、日野江城を拠点とする彼の領地はさながらキリシタン王国のようであった。一五八二年に大村純忠、大友宗麟とともに「天正遣欧使節」をヨーロッパへ派遣。晩年に甲斐へ追放され処刑されるきっかけとなった「岡本大八事件」は、江戸幕府の厳しい禁教政策につながった。





ONE ようこそ、長崎のミュージアムへ ANSWER

博物館・ 美術館ガイド

県内の博物館・美術館は、
長崎を掘り下げる旅にふ
さわしい場所。多種多様
な資料を通して、そのま
ちの特色がより鮮明に見
えてくるだろう。ここでは
九つの博物館・美術館が
収蔵する資料の中から、

海外交流と信仰の歴史
にまつわるものを厳選。ポ
ルトガル船の来航とキリス
ト教の伝来、二百五十年
以上にわたった禁教期な
どこのまちが歩んできた
歴史、受け継がれる文化
とともに紹介する。時空
を超えて、宝箱を開ける
ような旅に出かけよう。

※掲載している収蔵品の中には、常設展示され
ていない資料が含まれています。展示状況につ
きましては、各館にお問い合わせください。

世界文化遺産
長崎と天草地方の
潜伏キリシタン関連遺産とは

キリスト教禁教政策の下で、密かに信仰を伝
えた人々の歴史を物語る、他に類を見ない証
拠で、二県六市二町にまたがる十二の資産で
構成されています。



海の道がもたらした

繁栄と信仰



History

一五五〇年	平戸にポルトガル船が来航。ザビエル、平戸にて布教
一五九九年	平戸でキリシタンが禁教になる
一六〇九年	平戸にオランダ商館を設置
一六四一年	平戸から長崎出島へオランダ商館が移転

平戸・生月

雷にたとえられる、平戸瀬戸の激しい潮を越えて海上を行き交う船たち。

かつて平戸島は、博多と中国の寧波（ニンポ）を結んだ「大洋路」の中継地だった。

京都、堺、博多などから商人が訪れた九州北西部の小さな島は、国内有数の貿易港に発展。

西の都と呼ばれるようになり、やがて中国船が開拓した海路を通じて、ポルトガル船が来航する。

本格的なキリシタン時代の幕開けは、様々な思惑や憶測を生む火種になる一方で、

信仰を守り抜いた信徒たちの礎になった。

海の道がもたらしたのは繁栄だったのか、混乱だったのか。

白波を立てて渦巻く潮流の向こうに、先人たちの歩みの跡が見えてくる。

地球儀（複製）

一七〇〇年（原品）

松浦史料博物館所蔵 平戸オランダ商館展示
オランダ・アムステルダム製の地球儀。長崎出島より松浦家三十四代 松浦静山が入手したもの。

歴史ある建物と 多様なコレクション

一五五〇年、平戸島へのポルトガル船の来航を機に、イエズス会による本格的なキリスト教の布教活動が始まったのは、松浦家二十五代隆信たかのぶの頃だった。そもそも松浦家は、十二世紀に平戸をはじめとする九州北西部の海岸に発生した武士団「松浦一族（党）」に含まれ、のちに大名になった。松浦家が時の戦国大名にまで上り詰めることができたのは、後期倭寇の頭目だった王直と隆信がタッグを組み、海外貿易によって巨万の富を得ることができたから。ポルトガル船の来航も、王直の手引きによるものだったといわれている。

城下町の風情が残る平戸市街地をそぞろ歩くと、港からほど近い高台に立派な石垣が見えてくる。松浦史料博物館は、一八九三年に建てられた松浦家の私邸「鶴ヶ峯邸」を活用

した博物館。格式の高い、佇まいそのものも見どころと言えるだろう。

ここでお目にかかれるのは、平戸藩主となり、壱岐を含む長崎県北部を治めるようになった松浦家の繁栄を伝えるコレクション。学芸員の出口洋平さんは、その特色を「ラインナップの多様さ」と話す。「松浦家三十四代清（静山）によって収集されたものが大半を占めますが、歴代当主の愛用品など、代々伝わるものが残されています。文化財に登録された貴重な逸品はもちろんのこと、なぜこんなものまで集めたんだ？と不思議に思う、いわゆる珍品の部類に当てはまるようなものも含まれています」。



松浦史料博物館

平戸市鏡川町12
TEL.0950-22-2236
開館時間／8時半～17時半
休館日／12月29日～1月1日
入館料／一般660円、
小中高生330円



松浦史料博物館



栄華を誇った松浦家
お宝に込められた
殿様たちの威厳

Matsura
Historical
Museum

松浦史料 博物館

松浦史料博物館の敷地内にある、茶室「閑雲亭」。茶道鎮信流でたてたお茶のお供にいただけるのは、復元菓子のカースドスや烏羽玉（有料）。



たとえば、甲冑や太刀の拵えなどに見られる優れたデザインは、現代の視点で捉えても、奇抜かつ斬新、そしてどこか洗練されている。戦乱の世が終わった殿様たちが、自らの威厳を保つためにこだわったという。また、舶来品が多く含まれるところから、海外貿易に基づいた平戸藩の繁栄の歴史がうかがえる。

平戸にあった オランダ貿易の拠点

江戸時代初期の鎖国以前、平戸からポルトガル船は去ったものの、オランダやイギリスの商館は開設されていた。中でも平戸和蘭商館は、徳川家康からの朱印状を得て一六〇九年に設置。その後、幕府の命により長崎の出島へ移転すると、大洋路の時代から続いた、海外貿易港としての役割は終わりを迎える。

松浦史料博物館から歩くこと約十分。三百七十年余りの時を経て現代によみがえった、平戸オランダ商館にたどり着く。海沿いに佇む白亜の

建物は、一六三九年築造の平戸和蘭商館の倉庫を忠実に復元したものだという。ここでは松浦家コレクションの中から、ポルトガル貿易を含む、海外交流の歴史を伝える収蔵品を展示。松浦史料博物館とあわせて訪ねたい。

また、時間が許せば、平戸港を発着する的山大島や度島行きに船に乗って、船上から建物を眺めてみるのもおすすめだ。かつて海の道を渡り、平戸の地に降り立った人々。彼らが目にした風景が目の前によみがえる。大航海時代に想いを馳せることができる、貴重な体験になるだろう。



平戸オランダ商館

平戸市大久保町2477
TEL.0950-26-0636
開館時間／8時半～17時半
休館日／毎年6月第3火水木曜
入館料／一般310円、
小中高生210円

平戸オランダ

商館

Hirado
Dutch
Trading
Post



平戸オランダ商館



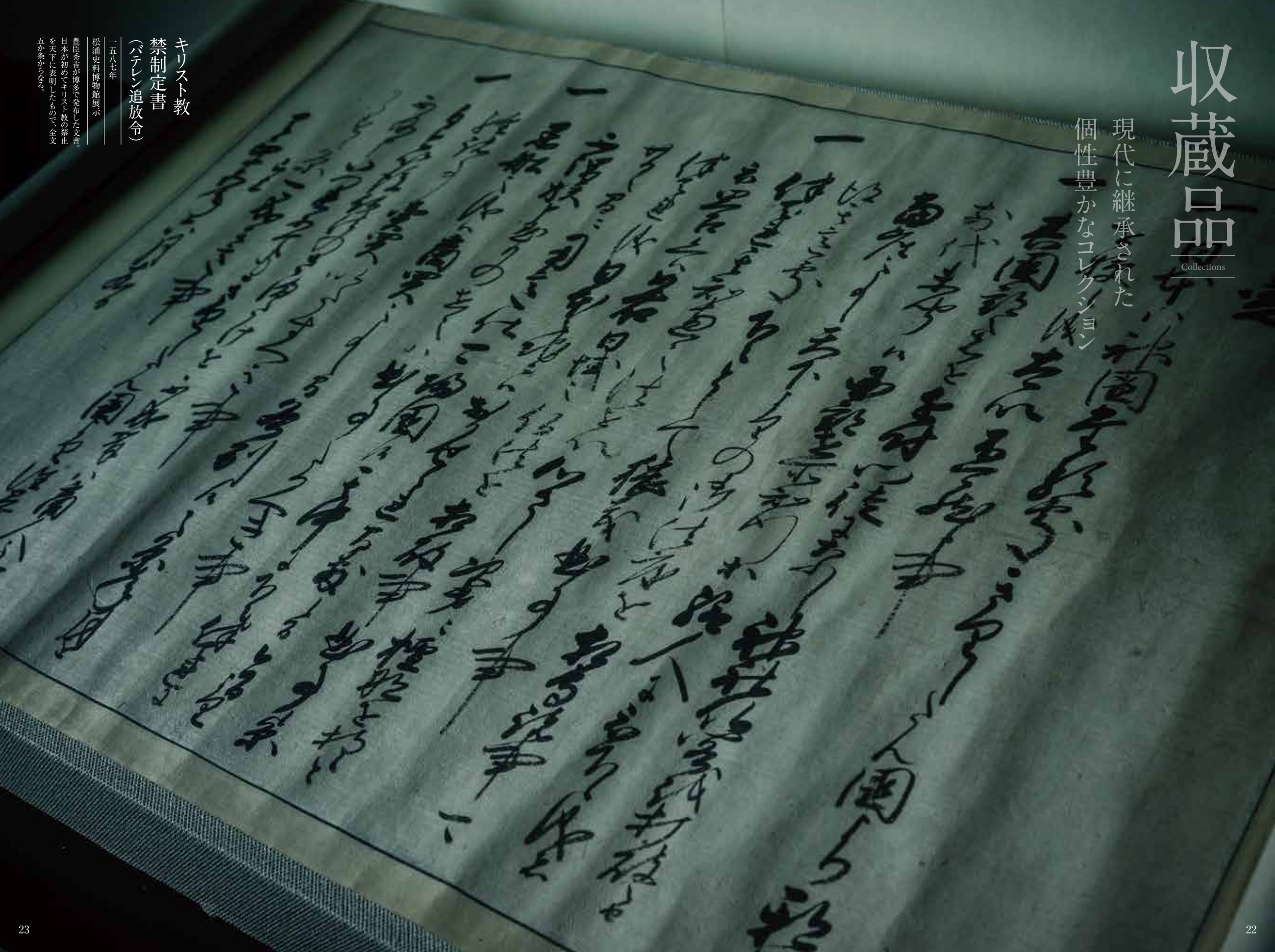
オランダ船船首飾木像(複製)

ポルトガル船模型

収蔵品

Collections

現代に継承された
個性豊かなコレクション



キリスト教

禁制定書

(バレン追放令)

一五八七年

松浦史料博物館展示

豊臣秀吉が博多で発布した文書。
日本が初めてキリスト教の禁止
を天下に表明したもので、全文
五か条からなる。

南蛮甲冑

十七世紀

平戸オランダ商館展示

輸入したオランダの甲冑を日本風に作り替えた、大変珍しいもの。大腿部を守る草摺など、もとはなかったパーツが加えられている。



船幟

(伝八幡船の旗)

十六世紀

平戸オランダ商館展示

八幡船と呼ばれた倭寇の船が使用した船印。中央に源氏の氏神「八幡神」の称号「八幡大菩薩」、右に平戸春日神社の祭神「春日大明神」、左に松浦家が守護とした式内社「志自岐大菩薩」の神号が墨書されている。



伊能図・平戸島図

一八二年

松浦史料博物館展示

一八二二年に平戸島内で測量が行われた。その際、平戸北部にある白岳山頂において、当時藩主だった堀が立ち合った。



受胎告知図柄菓子鉢

十七世紀

松浦史料博物館展示

禁教期にあたる十七世紀のもの。松浦家二十七代久信の妻がキリシタンだったこともあり、松浦家内のキリスト教信仰に関わるものと考えられている。オランダの都市デルフトで焼成されたもの。絵柄は、大天使ガブリエルがマリアに救い主の母となることを告げている場面。



大曲記

江戸時代前期

平戸オランダ商館展示

松浦家の事績を記した旧記。南蛮の黒船が来航し、全国から商人がやってきた平戸。西の都と表現されたという内容が記されている。





関連資産
平戸の聖地と集落

中江ノ島

生月島の東の沖合に浮かぶこの島は主に生月島のかくれキリシタンが、岩からしみ出す水を採取し聖水とする「お水取り」の儀式を執り行う大切な場所。船着き場がなく危険なため、上陸は原則禁止である。

平戸市生月町

Hirado City
Ikitsuki-cho
Municipal Museum
Shima no
Yakata

博物館・島の館

禁教期に始まった
かくれキリシタン信仰の
本質にふれる



信仰を守るために
併存を選んだ
信者たち

平戸大橋から車で約三十分。手つかずの自然が残る風光明媚な生月島は、禁教期に密かに守られてきたかくれキリシタン信仰が、受け継がれてきた島でもある。なぜこの地に、かくれキリシタンは生まれたのだろうか。

平戸松浦氏の重要な家臣だった籠手田氏と一部氏は、キリスト教に入信後、両氏が治めていた生月島、度島、平戸西部で一斉改宗を行った。すべての住民がキリシタンになっ

たものの、その後状況は一変する。江戸幕府が禁教令を出す十五年前。一五九九年、籠手田氏と一部氏が領地を捨てて約六百人の家臣・領民と共に長崎に向かったため、平戸はいち早く禁教に入ったのだ。

「信仰の有無を確認するために、絵踏や宗門改めが行われるようになると、踏絵を踏みながら信仰を続けるかくれキリシタンが一部の地域に現れました。取り締まる役所側としては、踏んでくれればキリシタンでないことを表向きには証明できる。一方、キリシタン側は、信仰を継続するために、仏教や神道を併存させる形を選びました。つまり両者合意の上で、信仰は成り立っていたのです」と、平戸市生月町博物館・島の館館長の中園成生さん。

かくれキリシタンコーナーでは、お掛け絵やコンタツ、お水瓶など信者から寄贈された信仰用具を展示。また、それぞれがどのように使われてきたのか、行事の様子を撮影した写真や映像などから理解できるよう工夫されている。



昭和初期のかくれキリシタンの住まいを復元。三方の壁を石垣に持たせかけた内側に、アダ・ヨコザ・ザシキ・ナンドの四間とニワ(土間)を配置した間取り。御前様とともに神棚、荒神様、お大師様、仏壇などが祀られている。

12月から4月にかけて行われていた鯨漁。冬の西海の海に、獲物を追いかける勇壮な男たちの様子をジオラマで紹介している。獲れた鯨からは主に油を取り、肉は塩漬けにした。輸送や冷凍技術が発達していなかった頃の漁師たちは、鯨のほかに、アワビ、アゴ、イカなど加工に向いている魚介類をおもなターゲットにしていた。

西海の海で 繰り広げられた 男たちのロマン

長年、かくれキリシタン信仰の調査・研究に取り組んできた中園館長は、次のように語る。「たとえばオラショというお祈りについて、一六〇〇年頃に唱えられていたものと、その後生月島で唱えられたものを比べてみても、ほとんど変化していません。従来、生月島のかくれキリシタンの信仰形態は、宣教師が不在になった後に残された信者たちが変容したものだと捉えられてきましたが、実はそうではなく、布教が始まった頃のキリシタン信仰の様相を、ほぼ忠実に継承していると考えられます」。

鯨、マグロ、アワビ、アゴ……。生月島沿岸は古くから豊穡の海といわれてきた。江戸時代には、捕鯨やマグロの定置網漁で栄え、日本最大の鯨組・益富組が生月島を本拠地と

した。益富組は、鯨製品の流通を管理するなどして安定経営を実現。海外との貿易港が長崎に移され、財政難にあえぐ平戸藩にもかなりの献金を行っていた。

島の館では、生月島の基幹産業である水産業にまつわる、ダイナミックかつ夢にあふれた歴史についても紹介している。江戸時代の鯨獲りの様子を表現したジオラマや天空を舞うミンクジラとツチクジラの骨格標本、捕鯨技術や定置網技術の変遷など、実物や模型を含めた立体的な展示は見どころがたつぷり。また、県内唯一の魚と漁業に特化した展示室「フィッシャーマンズアリーナ」も、まるで童心にかえったように楽しめる空間だ。



平戸市生月町博物館・島の館

平戸市生月町南免4289-1
TEL.0950-53-3000
開館時間／9時～17時(最終入館16時半)
※館内メンテナンスのため臨時休業あり
休館日／1月1日、2日
入館料／一般520円、
高校生310円、小中学生210円

フィッシャーマンズアリーナ

民俗コーナー「島の暮らし」



収蔵品

Collections

不在になった宣教師、
祈りをつないだ信仰用具



お水瓶

年代不明

「お授け（洗礼）」「戻し（葬儀）」のほか、人や家、牧野の蔵いの際に瓶の聖水を振りかける。瓶を覆っているのは、初節句のお祝いの際に作ったのはりを再利用した布。

お札

年代不明

平戸・生月島におけるかくれキリシタン信仰の特徴を表す代表的な資料マリア様の生涯の中の十五の場面を表したマリア十五玄義にもとづいて作られた十六の札で構成されており、札の吉凶で運勢を占った。



コンタツ

※部分

十六世紀—十七世紀

コンタツはロザリオのこと。本来はオラショを唱える際に用いた。本玉を組み合わせた十字の部分だけが残り、「戻し（葬儀）」で亡くなった人にかざして天国に導くのに用いられた。

お掛け絵

掛け軸に仕立てた聖画のこと。
いろいろな種類があり、
ヨーロッパを起源とするキリスト教絵画の
モチーフをなぞった絵柄が多い。
島の館では約三十のお掛け絵を所蔵している。

洗礼者ヨハネ

年代不明

米俵が描かれているこの絵は、キリスト教絵画のモチーフを継承する他のお掛け絵と一線を画す。生月島のキリシタンは、中江ノ島を水や風を治める洗礼者ヨハネ（サンジウ）の聖地として崇拝し、作神として五穀豊穡を祈願したと考えられる。



聖母子と一聖人

年代不明

幼子を抱く聖母の下に描かれているのは、イエス会の創始者であるフランシスコ・ザビエルとイグナシオ・デロヨラの二人の神父。生月島での布教が、イエス会主導で行われてきたことを示す資料でもある。





オラシヨ本

明治以降

行事の際に唱えられる祈り「オラシヨ」を記録した資料。生月島では声に出してオラシヨを唱えるため、紙に記録するようになったのは、禁教が解かれ書き記しても問題がなくなった明治以降と考えられている。



オマブリ

現代

和紙を切つて作る十字形の呪具。お守りとして人や牛に吞ませたり、家の柱に貼つたり、着物の襟や財布に入れたりして用いる。



お道具 (オテンペンシャ)

年代不明

キリシタン信仰では体を鞭打つ苦行のほか、病氣治しにも使われ、かくれキリシタン信仰でも病氣を吸ったり、家や牧野を祓い清めたりするのに用いる。

受け継がれる心 ①

北風が吹いたら 季節到来 平戸のアゴ漁

九月から十月頃に最盛期を迎えるアゴ（トビウオ）漁。平戸では、この時季に吹く風を「アゴ風」と呼び、九州から山陰にかけての海底で産まれた、ホソアオトビやツクシトビウオなどの稚魚が北風とともに南下してくる。以前に比べれば、漁をする船は少なくなったというが、二艘曳きの船が群れを追いかける光景は、昔も今も変わらない季節の風物詩である。

串に刺したアゴを、炭火でまんべんなくこんがり焼いてしっかり乾燥させると、旨味が深い上品なだしが取れる。黄金色に透き通ったアゴだしは、お正月の雑煮や茶わん蒸し、うどん、煮物など様々な料理と相性がいい。

撮影協力：林水産（平戸市）



かくれキリシタンの里

春日集落へ

命の源
安満岳に抱かれて

平 戸島の西海岸にある春日集落。のどかな自然に囲まれ、どこか日本の原風景を感じさせるこの集落には、信仰の歴史が息づいている。

約四百六十年前、生月島と同様に春日集落の住民もキリスト教に一斉改宗し、日本における初期のキリスト教布教の地となった。後にキリスト教は禁止されるが、人々は仏教や神道を受け入れながら、密かにキリシタンの信仰を継承。そして禁教が解かれた後もなお春日の人々は「かくれキリシタン」としてそれまでの信仰を継承し続けた。

集落にある案内所「かたりな」を訪ねた。築七十五年の古民家で出迎えてくれたのは、増田貞子さん。かたりなでは地元の人たちが地域のことや暮らしのことを話す「おもてなし」をしている。

貞子さんは優しい口調で「安満岳様」の話始めた。安満岳は平戸島の最高峰であり、春日集落はこの山からのびる三筋の尾根に挟まれている。「子どもの頃から毎朝顔を洗った後は庭に出て、安満岳様の方を向いて『今日も無事に過ごすことができますように』と拝んでいました。私は十九歳で同じ集落の人と結婚しましたが、嫁ぎ先の庭からは生家からは見えなかった安満岳様が富士山のようにきれいに見えます」。

安満岳は昔から神道や仏教における信仰の場とされているほか、かくれキリシタン信者が唱える「オラショ」の中にも「安満岳の奥の院様」という文句があるという。異なる宗教が共生し、信仰が重なり合う安満岳。貞子さんは言う。「私は今朝も、安満岳様に手を合わせてきましたよ」。





「かたりな」には、春日集落に伝わる納戸神と呼ばれるご神体を展示している展示部屋や、土産品などを販売している多目的・物産部屋がある。



「かたりな」では春日の水でいれたお茶でおもてなししてくれる。運がよければ、おばあちゃんたちの手作りのお漬物などが並ぶことも。

貞

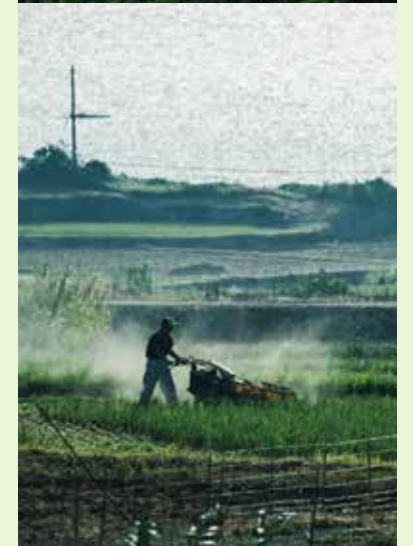
子さんは春日集落で生まれ、結婚し、四人の子どもを育てた。若い時は苦労も多かったと振り返る。「私は姑を早くに亡くした上に舅は足が悪かったため、子どもが小さいうちは、夫と二人ですべての仕事をしなければなりません。昼間は田んぼ、夜は櫓を漕いでイカ釣り、大潮の日には天草やワカメを採りに海岸へ…と、とにかく忙しい日々でした。仕事の頃は毎年十一月にはお祭り

が追い付かず、夫と二人で月夜の晩に朝まで鎌で稲を刈ったこともあり。あの日のことは忘れられません。それでも楽しい時代だったと貞子さんは笑う。「どこへ行くのも近所の人と誘いあって、集落の人たちが仲良しでした」。

集落の中央にある丸尾山は、地域の人たちにとって大切な存在のようだ。「私が子どもの頃は毎年十一月にはお祭りがあり、集落の人が皆集まりました。男の子たちは相撲をとり、女の子たちは歌を歌いました。良い思い出ですね。丸尾様は田んぼの神様ですから『良いお米ができますように』とお参りします」。

集落に古くからある家には神棚と仏壇の他に、納戸神が祀られている。貞子さんの嫁ぎ先にも人目につかない座敷の奥に納戸神を祀っていたという。「年に二回、集落の男の人たちが集まってお祈りがありましたが、私はお祈りの後のご馳走の準備をするだけで、何が祀つてあるかも見たことがありませんでした」。

信仰についての記憶はいくつもある。「小さい頃、私の兄と姉は父に連れられて、中江ノ島へ行っていました。中江ノ島は春日の沖合約二キロに浮かぶ島で、禁教時代、主なキリシタン信者が処刑された島で、聖地とされており、かくれキリシタン信者が聖水を汲む行事が行われている。「父は『聖水を汲む場所はいつも水が流れているわけではなく、押したら水が出てくる』と話していましたね。現在、春日集落ではかくれキリシタンの組織的な信仰は消滅している。それでも貞子さんの心の中には信仰にまつわる思いが鮮やかに残っていた。



丸尾山

営みに出会う旅 ①

春

日集落の見どころは、
なんと言っても棚田だ。

丸尾山から見る、山から海へと
連なる一面の棚田は絶景で、見
る者を圧倒する。そしてどこま
でも続く石垣に先人たちの生き
る力を見る。

春日の棚田は豊かな森に囲ま
れた安満岳から流れ出る水を利用
して拓かれたという。春日の
人々は、まさに「安満岳様」の
湧水に生かされている。貞子さ
んが米や苗のことを「お米様」
「お苗様」と呼ぶ気持ちが分か
るような気がした。

貞子さんの話は尽きない。子
どもの頃、舗装されていない道
を毎日六キロも歩いて小学校へ
通ったこと、畑で育てている野
菜の話、健康の秘訣に長生きの
秘訣……。泣いたり笑ったりして
過ごした八十八年の人生に耳を
傾ける時間は、なんとも心地よ
い。

春日集落の稲刈りは早く、お
盆前には刈り終わるという。貞
子さんは、最後にこう言ってみ
送ってくれた。「今度は田んぼ
にお米様がいらっしゃる時にお
いでください。黄金色に色付い
たお米様が揺れて、本当にきれ
いですよ」。

丸尾山では、十六世紀と思わ
れるキリシタン墓が多数見つ
かっているという。当時、墓地
には十字架が立てられることが
多かったことから、丸尾山の頂
上にもかつて十字架があったと
考えられている。その場所に今
あるのは、小さな祠。丸尾山の
神様は美しい棚田を、そして春
日の人々の暮らしをそつと見
守っている。

今度は田んぼに
お米様がいらっしゃる時に
おいでください

営みに
出会う
旅 ①

春日集落案内所
かたりな

平戸市春日町166-1
TEL.0950-22-7020
開館時間／
8時30分～17時30分
休館日／
12月31日～1月3日

春日町はその文化的で豊かな景観の価値が認められ、国の重要文化的景観に選定されている。



関連資産
黒島の集落

黒島教会

佐世保市本土から西へ約十二キロ離れた黒島は、移住した潜伏キリシタンが平戸藩の牧場跡を開拓して密かに祈りを続けた地。禁教が解かれた後、カトリックに復帰した信徒たちは、マルマン神父の設計をもとに黒島教会を建立した。

異文化と出会ったまち

長崎市



History

一五八〇年	大村純忠が長崎と茂木をイエズス会に寄進
一五八七年	豊臣秀吉が伴天連追放令を發布
一五九七年	二十六聖人が西坂の丘で殉教
一六一四年	江戸幕府が全国に禁教令を発令
一六四一年	平戸から長崎出島へオランダ商館が移転
一六四四年	国内最後の神父が殉教し、国内に不在となる
一八六五年	信徒発見
一八六七年	浦上四番崩れが起こる
一八七三年	キリシタン禁制の高札が撤去される

平戸、横瀬浦、そして福田から長崎へ。

ポルトガル船が来航した港のそばには新しいまちが生まれ、

たくさん教会堂が建てられた。

さながら小ローマのようだった長崎のまちにも、

やがて禁教の高札が掲げられる。

国際貿易都市として華やいた時代。

その陰には、信徒発見までの長い道のりがあった。

南蛮人来朝之図 部分

桃山時代 複製

長崎歴史文化博物館蔵

ポルトガル船の来航と貿易、キリスト教の教会・南蛮寺などを題材としており、長崎に来航した南蛮人の風俗や交易品が分かる国認定の重要美術品。写真の屏風は複製だが、実物が収蔵されている。

長崎歴史

繁栄した都市
異文化交流の足跡

文化博物館



無用な争いを避ける そのための論理

一五七一年、ポルトガル船が初めて長崎に入港したのは、大村純忠とイエズス会が開港協定を結んだ翌年だった。禁教により海外交流が厳しく制限されても、オランダ船や唐船が来航し、長崎のまちは国際貿易都市として華ひらくことになる。出島や唐人屋敷を起点に様々なモノやコトが行き交うようになった時代。禁教の下、異なる民族はどのように共生していたのだろうか。

長崎歴史文化博物館の学芸員・深瀬公一郎さんは次のように語る。「江戸時代の長崎には異なる民族や文化、宗教が衝突することなく暮らせる仕組みがありました。出島や唐人屋敷など交流の場を限定した居留地がそのひとつです。また奉行所の役人や町人も、浦上村の人々がキリシタンであることには薄々気づいていたけれども、見て見ぬふりをして

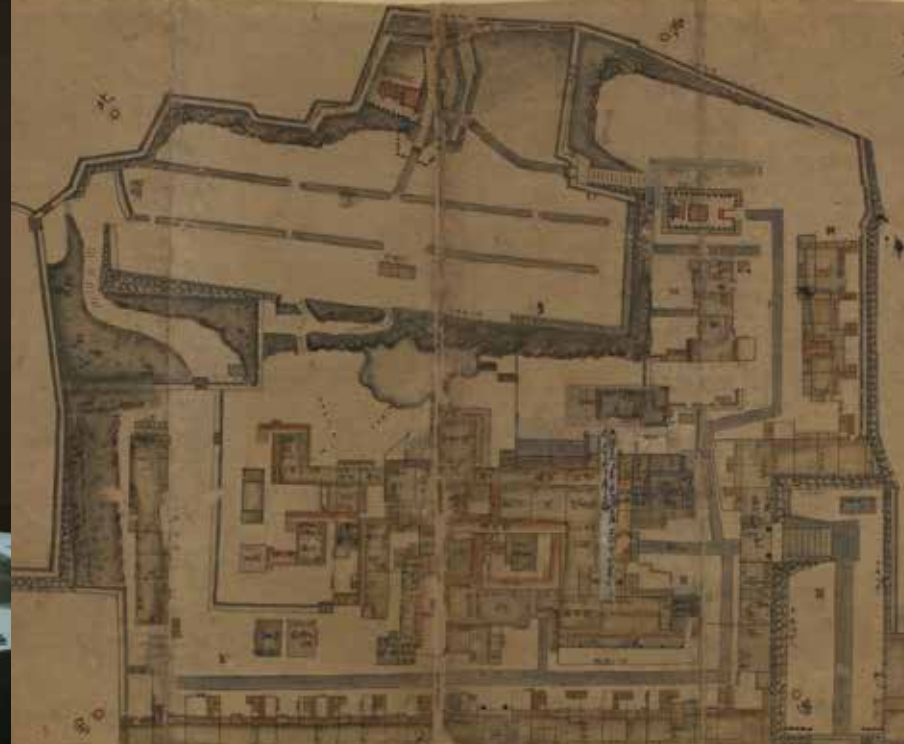
いたのではないのでしょうか。キリシタンは邪宗であってここにいた人たちは異宗。邪宗は幕府に反抗するけれども、異宗はそんなことはしない。無用な争いを避けるための論理の下で、共に暮らしていたのです。その頃の長崎のまちは、多様性に寛容なまちだったのです。しかし幕末になりふたたび外国人宣教師が現れると、浦上の信徒たちは信仰を告白し、新たな展開を迎えることになりました」。

長崎のキリシタン史を語る場合、厳しい弾圧や迫害の歴史に目を向けられることが多い。その一方で「長崎には他者を排斥せず受け入れて融合する文化がある」と深瀬さんは考える。

西洋との出会いや貿易と都市の繁栄、人々の交流など長崎のまちを舞台に繰り広げられてきた多様な歴史の真実。長崎歴史文化博物館では、それらのポイントについて貴重資料や分かりやすい解説とともに紹介している。



マリア観音像(すべて東京国立博物館蔵)



長崎諸官公衛図



踏絵(東京国立博物館蔵)

奉行所時代へ タイムスリップ

緑豊かな長崎公園の一角、長崎歴史文化博物館が位置する場所にはかつて長崎奉行所立山役所があった。そしてさらにさかのぼると「山のサンタ・マリア教会」が建っていた。江戸幕府直轄領の中でも、長崎奉行所には町政や市中巡見、長崎貿易の管理・統制、キリシタンの取り締まりなど重要職が任せられていたという。

博物館が建設される際には発掘調査が行われ、立山役所の石垣や石段の一部が出土。それらが現地で再利用されているほか、建物自体にも奉行所時代を彷彿とする仕掛けが施されておりタイムスリップした気分が楽しめる。設計を担当した世界的建築家・黒川紀章氏（故人）が奉行所の内部を調べるうえで参考にしたのは、一八〇八年に描かれた絵図『長崎諸官公衛図』だった。奉行所を「実

物大の展示品」と捉えた黒川氏は、絵図に記された間取りから奉行所の一部を現代にのみがえらせた。また常設展示室には、踏絵などキリシタンの取り締まりに使われたものが展示されており、奉行所があった事実を垣間見ることができる。

長崎のまちは、小さいながらも見どころが溢れている。観光の際には、予習のためにまずここを訪れてみるのもいい。もしくは観光地を巡った後、気になったり疑問に感じたりしたポイントの答え合わせをするのもいいだろう。



長崎歴史文化博物館

長崎市立山1丁目1-1
TEL.095-818-8366
開館時間／8時半～19時
(12月～3月は18時閉館)
※いずれも最終入館は30分前まで
休館日／第1・3月曜
常設展観覧料／大人630円、小中高校生310円
※入館は無料



収蔵品

Collections

人々に影響を与えた西洋文化の輝き



泰西王侯図屏風

(イエズス会セミナリヨ画学舎)

一六二二—一六二四年頃

重要文化財(国指定)

全十二図からなり、一六二〇年以降西洋で出版された銅版画をもとに制作された。当時の宣教師たちは日本の武将たちから西洋の武人の武装姿や戦闘の様子分かる作品を求められたといわれ、この作品も要求に応えるために制作されたものだろう。長崎のイエズス会セミナリヨ画学舎でジョン・ニッコラの指導のもと描かれたと考えられている。また、盾に記された「IHS」に十字架をつけた模様はイエズス会の紋章。現存する初期洋風画(世俗画)の画内にイエズス会との直接的な関係を示すものは本作以外にない。



弾琴図

一五九六—一六一四年

日本人が見よう見まねで制作した西洋風の絵画を「洋風画」と言う。この作品は初期洋風画に属し、作者はイエズス会で学んだ日本人画家と思われる。石造りの建物のそばで、西洋婦人がリュートを弾いている様子が描かれている。



螺鈿蒔絵 四季彩洋櫃

桃山時代

スペインやポルトガルのバルゲリーニョ化粧筆筒をモデルにして日本で制作された輸出品。蒔絵や螺鈿細工によるきらびやかな装飾が、南蛮ブームに華やいた時代を物語っている。



伊東マンショ 肖像画

一五八五年

大友宗麟の名代として天正遣欧使節に参加した伊東マンショ。二〇〇五年十一月にローマのクレリウス三世の生家で発見された作品は、当時十五歳か十六歳のマンショがやや右側から描かれている。木炭とサンシヨで描かれた顔のみに淡い水彩がほどこされており、マンショ単独でここまで精巧に描かれているものはこの作品のほかにはない。



キリシタン制札
(正徳元年)

一七二一年

キリシタンを摘発した者に
対して懸賞金を支払うこ
とを告知。はてれんには
銀五百枚、いるまんには
銀三百枚の懸賞金と記さ
れている。

キリシタンを摘発した者に
対して懸賞金を支払うこと
を告知。はてれんには
銀五百枚、いるまんには
銀三百枚の懸賞金と記さ
れている。

キリシタンを摘発した者に
対して懸賞金を支払うこと
を告知。はてれんには
銀五百枚、いるまんには
銀三百枚の懸賞金と記さ
れている。

キリシタンを摘発した者に
対して懸賞金を支払うこと
を告知。はてれんには
銀五百枚、いるまんには
銀三百枚の懸賞金と記さ
れている。

正徳元年八月

奉引

向けられた疑いと
取り締まりの史実

受け継がれる心 ②

四百年の時を超えて
語りかける

サント・ドミンゴ教会

一六〇〇年前後の長崎のまちは「小ローマ」と呼ばれるほどに、いくつもの教会が建ち並んでいた。その一つが、現在の桜町小学校(旧勝山小学校)の場所にあった「サント・ドミンゴ教会」だ。サント・ドミンゴ教会が建っていた期間はわずか五年。にもかかわらず、二〇〇〇年に行われた発掘調査では聖母像が彫られたメダイや真鍮の十字架、八十枚を超える数の花十字紋瓦などが出土し、専門家たちを驚かせた。

教会が建っていた場所は現在、資料館になっており、教会遺構がそのまま展示されている。長崎のまちで「小ローマ」と呼ばれた頃の面影を探すのは難しい。しかしここに立てば、四百年の時を超えて、歴史の息づかいが聞こえてくる。

サント・ドミンゴ教会跡資料館

長崎市勝山町30-1(桜町小学校内)
TEL.095-829-4340 開場時間/9時~17時
休館日/月曜日、12/29~1/3 入館料/無料



江戸から明治へ 変貌した町の動き

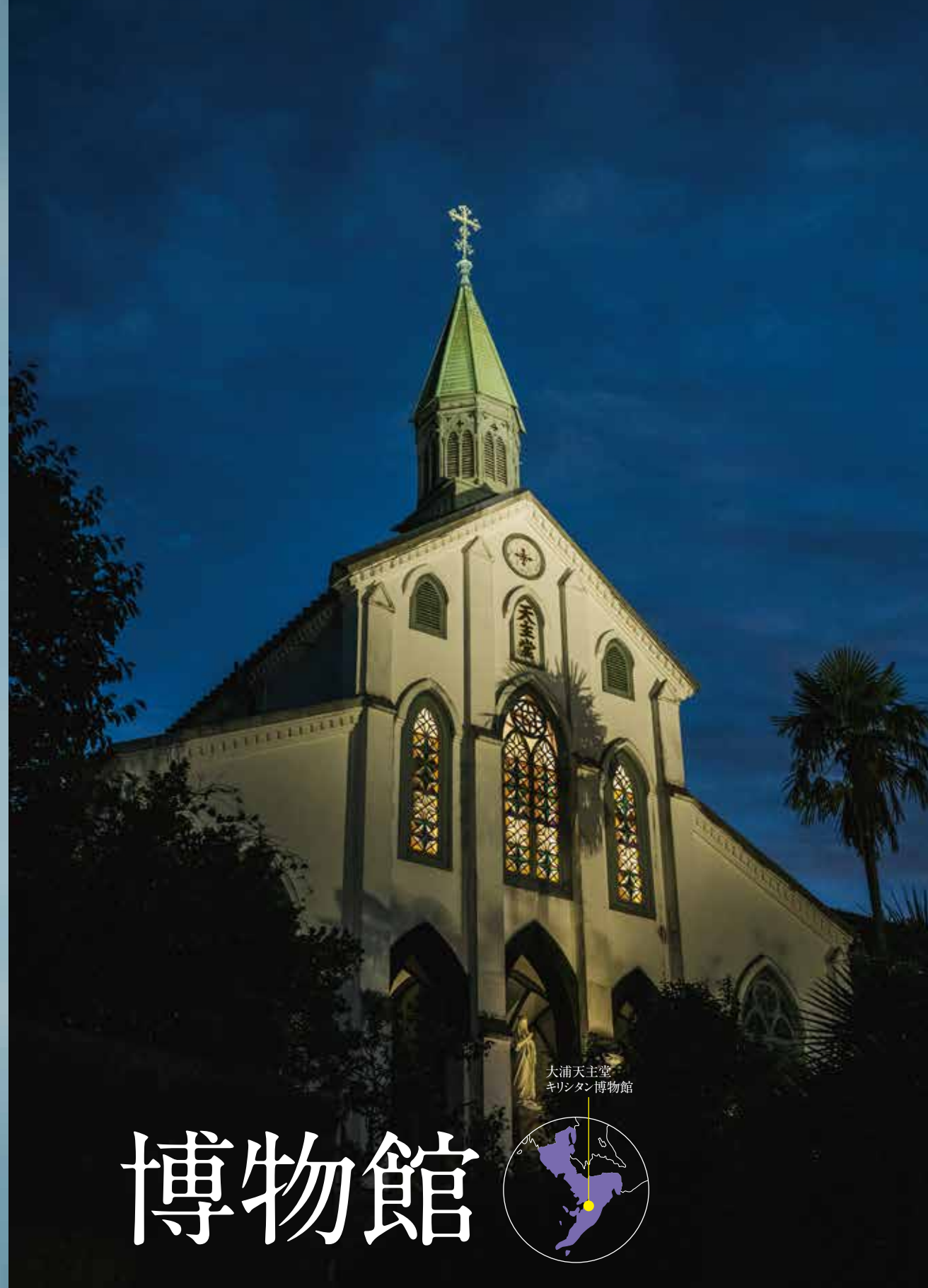
安政の五カ国条約により、一八五九年以降アメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスとの対外貿易が本格的に始まった長崎。増加する外国人に対応するため、南山手、東山手、大浦に居留地が造成され、外国人信徒のために大浦天主堂（通称フランス寺）が建てられた。変貌するまちの空気は、潜伏していたキリシタンの心を突き動かしたのである。大浦天主堂を訪れた浦上村の信徒は、プティジャン神父にこう伝えたという。「サンタ・マリアの御像はどこ」。信徒発見後、ふたたび激しさを増したキリシタンに対する弾圧、そしてキリスト教の再布教。キリシタン禁制の高札が撤去されたのは、一八七三年のことだった。

信仰告白の場となった大浦天主堂

再布教期以降の
長崎とキリスト教史

Oura
Church
Christian
Museum

大浦天主堂 キリシタン



大浦天主堂
キリシタン博物館

博物館

現存する日本で最古のカトリック教会堂。
西坂の丘で殉教した日本二十六聖人に捧げられた教会でもあることから、
殉教地（西坂）の方向に向けて建てられている。



大浦天主堂
キリシタン博物館

長崎市南山手町5-3 TEL.095-801-0707
開館時間／8時半～18時(11月～2月は17時半閉館)
※いずれも最終入館は30分前まで
休館日／年中無休
(教会行事や展示替えなどで休館する場合があります)
入館料／大浦天主堂拝観料に含む
(大人1000円、中高生400円、小学生300円)

季さんは次のように語る。「長崎で親しまれているド・ロ神父が手がけたデザインと日本人大工による漆喰や瓦、レンガなどを用いた和洋折衷の美をご覧ください。また展示を通して、キリシタン史の全容を学んでいただけるほか、日本におけるキリスト教の再布教期にあたる時期に、長崎が果たした役割についても理解していただけるでしょう」。

世界文化遺産に登録され多くの観光客が訪れる大浦天主堂。潜伏していたキリシタンたちに一筋の光をもたらした祈りの地は、現在に至る道のりを深く知るほどその存在の尊さに気づく。

の境内には、二つの建物が佇んでいる。旧羅典神学校と旧長崎大司教館だ。現在は大浦天主堂キリシタン博物館として活用されており、訪れた人々に西洋との出会いや禁教・潜伏期の歴史、信徒発見に至る日本のキリシタン史などに関する学びの場を提供している。収蔵品の多くは、キリスト教の再布教期以降に集められたもの。ド・ロ神父が制作したド・ロ版画《善人の最期》など布教に用いられたものや、カトリックに合流したのを機に信徒から託された信仰用具なども含まれている。

印刷事業を担当していたド・ロ神父の多才ぶりは、この二つの建物にも表れている。現在、国の重要文化財に指定されている旧羅典神学校は、禁教が解かれた二年後に建設。一九一五年には二代目の長崎大司教館が建てられ、いずれもド・ロ神父が設計を手がけた。外壁に取り付けられた「よろい戸留」など、フランス仕込みの意匠も建設時のまま大切に保存されており、建物そのものが貴重な宝といえるだろう。学芸員の島由

旧長崎大司教館

旧羅典神学校

元和の大殉教図



一八七五年—一八七九年

一八七五年から一八七九年に制作された通称「ド・ロ版画」。布教の際に教義を分かりやすく説明するための教義図と教会など祈りの空間を飾るための聖人図が五種類ずつあるこの教義図の一つ。信徒が死を迎える前に、司祭により最後の秘跡を受ける様子が表されている。



収蔵品

Collections



ふたたび始まった
布教活動が
信徒たちに光をもたらす

司教杖と手袋

十九世紀—二十世紀

杖

司教が儀式の際に手にする。フランス系イエズス会が設立した上海の孤児院には子どもたちに技術を習得させるための工房があり、この杖はそこで作られたもの。

手袋

司教が特別なミサの際に使用。赤色のほかに白、緑、紫、黒、バラ色があり、典礼によつて身に着ける色が異なる。



ミトラ

年代不明

司教が典礼の際にかぶる冠。

十字架上の キリスト像

年代不明
磔にされたイエスキリスト像。もともとは十字架に固定されていたと思われる。五島市奈留島のかくれキリシタンが代々受け継いでいたものと伝わる。



プティジャン 司教の 司牧書簡

十九世紀
大勢の浦上の信徒が検挙された「浦上四番崩れ」。プティジャン神父は、国内各地へ流罪となった信徒に、励ましの手紙を送った。ローマ教皇が浦上の信徒を心から案じており、祈りを捧げていると綴られている。



板踏絵

無原罪の

御宿りの聖母（複製）

一九五一年

一九五二年に行われた大浦天主堂改修工事を記念して制作されたもの。東京国立博物館所蔵の踏絵の複製になるが、板の部分には天主堂の古材が使用されている。キリシタンから没収した信仰用具を、板にはめて補強したものを板踏絵と呼ぶ。



ロザリオ

十九世紀—二十世紀

一九〇七年に出津教会の助祭として赴任した中村吾作神父が、当時主任司祭を務めていた下口神父から贈られたものと伝えられている。三角金具には「不思議のメダイ」が表されている。



受け継がれる心 ③

モッテコイの掛け声が 響き渡る三日間 伝統の長崎くんち

“おすわさん”の愛称で親しまれている諏訪神社の秋の大祭、長崎くんち。一六三四年から続く祭礼は二人の遊女、高尾と音羽が諏訪神社の神前に謡曲「小舞」を奉納することが始まりといわれる。

現在は毎年十月七日（前日）・八日（中日）・九日（後日）の三日間にわたって執り行われ、見どころは長崎市内五十八カ町の中から、その年の当番町が奉納する絢爛豪華な演し物。龍踊や鯨の潮吹き、コッコデショなど特色ある奉納踊は、国の重要無形民俗文化財に指定されており、その中には唐人船、阿蘭陀船、龍船など船をモチーフにした演し物も少なくない。

かつて長崎のまちに繁栄をもたらした海の道。伝統ある祭りは、様々な民族が船を使って行き来した海外交流の歴史を今に伝えている。



受け継がれる心 ④

長崎の伝統文化が
咲き誇る
華やかなおもてなし

朱塗りの円卓を囲んで、大皿に盛られた料理を各人が小皿に取っていただく卓袱料理は、江戸時代に国際貿易の中心であった長崎で発展した、華やかな宴会料理。日本料理をはじめポルトガル、中国、東南アジア、オランダなど異国の料理が融合した長崎独自の伝統料理だ。

現在、卓袱料理は長崎市内の料亭でいただくことができる。宴を盛り上げてくれるのは、艶やかに舞う長崎検番の芸子衆たち。かつては江戸の吉原、京の島原と並ぶ三大花街と謳われた長崎丸山で芸の道に生きる彼女たちは、この地が育んできた伝統文化そのもの。長崎のおもてなしは、皆で一つのテーブルを囲んで過ごす和やかな時間の中にある。



スペイン美術の 真髄に迫る 須磨コレクション

長崎を貿易の拠点として選んだのは、フランシスコ・ザビエルとともに来日したスペイン人宣教師コスメ・デ・トーレスだった。以来始まった長崎とスペインの交流は、ある日本人男性が所有していた美術品が長崎に渡る要因にもなる。

第二次世界大戦中、特命全権公使としてスペインに赴任した須磨彌吉郎という人物がいた。長崎県美術館が誇る『須磨コレクション』は、須磨が在任中に現地で収集した美術品によって構成されている。須磨は長崎出身ではない。息を引き取る約十日前に「スペインとゆかりの深い土地へ」と自らの意思で長崎県に寄贈したという。

かつて須磨がスペインで収集した美術品は千七百点以上にのぼり、長崎県美術館はそのうちの約五百点を

所蔵している。学芸員の森園敦さんはスペイン美術の魅力をこう語る。「フランスやベルギーのような華やかさはなく、むしろ暗い印象を持っています。その一方で、華美な装飾がそぎ落とされることによって、描かれた対象の本質がストレートに観る者に伝わってくるでしょう」。また森園さんは「須磨の存在が新たな交流をはぐくむ架け橋になっている」とも話す。「当時のスペイン政府は、コレクションの返還交渉の過程で、須磨が所有していた美術品の中から歴史的に重要と思われるものを買ひ上げました。現在それらの作品はプラド美術館などで展示されており、私たち長崎とスペインの文化交流の懸け橋としての役割を担っています」。

長崎水辺の森公園に隣接する美術館の目の前には、かつて異国の人々が目指した長崎の港が広がっている。海を隔ててはぐくまれてきた交流の歴史は、先人たちが遺した美術品を通じてこれからも続いていく。



長崎県美術館

長崎港を一望
景観と調和した
憩いのアート空間

Nagasaki
Prefectural
Art
Museum

長崎県 美術館



長崎県美術館

長崎市出島町2-1
TEL.095-833-2110
開館時間／10時～20時
休館日／毎月第2・第4月曜
(休日・祝日の場合は火曜休館)、
12月29～1月1日
コレクション展覧料／一般420円、大学生310円、
小中高生210円、70歳以上310円
※入館は無料

写真左／常設展示室。須磨コレクションをはじめとする近現代のスペイン美術に加えて、洋画・工芸・日本画・写真・版画など長崎ゆかりの作品も展示している。

収蔵品

Collections

天正遣欧使節も謁見
スペイン最強時代の国王



フェリペ2世

作者不詳

一六〇〇年頃（須磨コレクション）

フェリペ2世は二十九歳の若さで国王に即位。スペインを政治的・経済的にヨーロッパ最強の王国にまで発展させたといわれている。本作では、四十歳前後の相貌がほぼ等身大のサイズで描かれている。



原の城

一九七一年

ブロンズ

舟越が原城跡を訪れた約十年後に制作。壮絶な戦いの地だったことがまるで嘘のように長閑な景色の中に、討死したキリシタン武士が立ち上る姿を思い描いた。

彫刻家・舟越保武と長崎のキリシタン



二十六聖人の
ためのデッサン
聖ドビュ茨木

一九六一年

長崎二十六殉教者記念像の制作時に描かれたデッサンの中の一枚。二十六人の視点の向きなど、構想を重ねた末に等身大の像が完成した。

日本二十六聖人 殉教地(西坂公園)

かつては長崎港を一望できたという長崎駅前の小高い丘。西坂公園は西坂の丘と呼ばれ、六人の宣教師と二十人の日本人信徒が殉教した地としても知られている。一九六二年、日本二十六聖人列聖百年を記念して記念館、記念聖堂(聖フィリッポ教会)、レリーフが建立された。レリーフには彫刻家の舟越保武が制作した二十六人の昇天する様子を象った等身大の像がはめこまれている。





ました。当時の経済の中心は中国。日本の銀は質が良く、中国では数倍の値が付きましたから、大きな利益が出ました。

出島の敷地は約四千坪。端から端まで歩いてもすぐだ。深瀬さんは、この狭さこそが出島の最も大きな特徴だと言う。「日本では、出島は西洋との唯一の“窓口”と言われていますが、グローバルな視点から考えると、長崎は世界の



出島へと誘致するが、深瀬さんはそうしたところに長崎町人の商売人気がよく表れていると話す。「でもオランダにも大きなメリットはあり

出島はもともとキリスト教の布教を行っていたポルトガル人を収容する目的で、一六三六年、二十五人の有力な長崎町人たちによって築造された。その後、ポルトガル船の来航が禁止されると、彼らは平戸にあったオランダ商館を

つて国際貿易都市として発展してきた歴史をもつ長崎には、それぞれの時代に外国人たちが暮らす居留地があった。ここでは東アジア交流史を専門とする長崎歴史文化博物館の深瀬さんと三つの居留地をめぐりながら、国際貿易都市・長崎の魅力に迫る。

か

つて国際貿易都市として発展してきた歴史をもつ長崎には、それぞれの時代に外国人たちが暮らす居留地があった。ここでは東アジア交流史を専門とする長崎歴史文化博物館の深瀬さんと三つの居留地をめぐりながら、国際貿易都市・長崎の魅力に迫る。

貿易都市“の一つであり、繁栄を極めた魅力的なまちでした。しかしその国際貿易都市の拠点がこんなにも小さくて、狭い。そのギャップに驚かされます。

出島のもう一つの特徴は軍事的緊張感がないこと。「オランダは貿易を優先するために日本に徹底的に従う立場を取り、武装解除を行いました。ですから出島では争いは起きていません。一般的には外国人を狭い場所に閉じ込める行為は迫害といわれてしま

長崎歴史文化博物館 学芸員 深瀬さんと往く

三つの居留地

出島・唐人屋敷跡・旧外国人居留地

いますが、軍事的緊張感がないゆえに出島の歴史は迫害ではなく、文化交流という視点で語られるのです。出島が二百年以上にわたって国際貿易都市であり続けたのは、平和がもたらしたものであった。

江戸時代の人になったつもりで歩いてみましょう。

出島



肥前長崎図(長崎歴史文化博物館蔵) 3つの居留地はこんなに近くにあった!



漢洋長崎居留図巻 部分(長崎歴史文化博物館蔵)
出島では様々な人種の人たちの交流があったことが分かる。



現在、出島では16棟ものの建物が復元され、19世紀初頭の姿を取り戻そうとしている。

出 島を後にし、賑わう中華街を通過して唐人屋敷跡へと向かう。わずかに分ほどの距離にオランダ人と中国人が暮らしていたことを思えば、改めて長崎は独特の歴史を有していると感じる。唐人屋敷が造成されたのは一六八九年。市中にあふれていた密貿易を取り締まるため、中国人たちを一カ所に集める政策であった。



深瀬さんは、抜荷が横行した背景には、船乗りたちの貿易があると話す。「当時、商人だけでなく船乗りたちも貿易をしていました。船乗りたちにとって貿易は魅力的な収入であり、優秀な船乗りたちが唐船に集まっていたのです。ですから唐人屋敷に閉じ込められ貿易が制限されると破産してしまうので、彼らは抜荷をせざるを得ませんでした」。

くかなり、貿易で潤っていた長崎はすぐに立ちいかなくなってしまう。「長崎奉行は幕府の命令に従って抜荷を取り締まるか、長崎のまちの繁栄のために規制を緩めるかを選ぶ必要があり、常にジレンマを抱えていたのです」。

名前は、長崎奉行が付けたものです。そこには、ここは決して『唐人町』ではなく、あくまでも宿泊所、という意味がありました。しかし唐人屋敷が完成すると、中で屋台を出す中国人たちが現れ、数十年後には実質『唐人町』になっていました。出島は商館ですが、唐人屋敷は町として機能していたのです。唐人屋敷の魅力は、こうした人間のたくましさにあるように思います」。



漢洋長崎居留図巻 部分
(長崎歴史文化博物館蔵)
唐人屋敷は出島の2倍ほどの大きさで2階建ての瓦葺き長屋が20棟あり、約2000人の収容能力を持っていた。

唐人屋敷跡

営みに
出会う
旅 ②



唐人屋敷跡には中国人たちが祈りの場として建てた土人堂、観音堂、天后堂が残っており、当時を偲ばせる。

オランダ坂の上に建つ東山手十二番館は1868年に建てられたもので、東山手地区に現存する最古の遺構。



異

国情緒豊かな長崎を
実感するのが、東山
手・南山手エリア。石畳の坂
を上げ、洋館や教会が建ち
並び、風に乗って船の汽笛が
聞こえてくる。まちは外国人
たちが暮らした頃の空気をま
とい、どことなく華やかだ。
横浜・函館とともに開港し
た長崎のまちに外国人居留地
が造成されたのは一八五九年
のこと。グラバーを筆頭に、

彼らは一攫千金を夢見て、長
崎の地に足を踏み入れた。
「幕末には攘夷運動により、
外国人が襲われる事件が起こ
るようになります。居留地
は外国人を守るために造ら
れました。外国人を閉じ込
めるために造った出島や唐
人屋敷とは発想が逆ですね」。
こうして長崎のまちに三つ目
の居留地が誕生した。そして
これにより、造船と炭鉱とい

う新たな産業が生まれ、近代
の長崎が形作られてゆく。
開国後、出島は外国人居
留地に編入され、唐人屋敷
は焼失した。しかし長崎のま
ちにはその面影が色濃く残っ
ている。まちを歩けば朱色の
唐寺が目惹き、港を見下ろ
す丘への道はレンガ造りの壁
が続いている。
深瀬さんは「こんなに狭い
範囲に三つの居留地がある

こと、また一つのまちが国
際貿易都市として数百年続
いたことは珍しい」と話す。
「出島・唐人屋敷・外国人居
留地によって衝突を避けなが
ら、長崎は国際貿易都市とし
て繁栄しました。これは異文
化交流の成功事例です。一方、
異文化交流の衝突が激しくな
ると戦争になります。なかで
も原爆は人類史上、最大の悲
劇の一つです。長崎は異文化

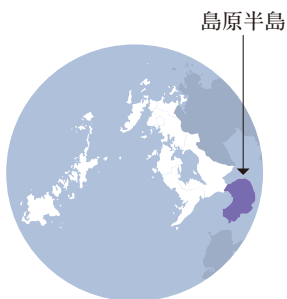
交流の光と影を知っています。
この二つを同時に記憶してい
るまちというのは、世界中探
してもありません。私たちが
長崎の歴史と文化から学ぶこ
とは、たくさんあるのではな
いでしょうか」。三つの居留
地が知られざる国際貿易都
市・長崎の姿を浮かび上がら
せてくれる。

旧外国人居留地

営みに
出会う
旅 ②

キリシタンから届く

メッセージ



History

- 一五七九年 巡察師ヴァリニャーノが口之津に来航
- 一五八〇年 有馬晴信が受洗。有馬にセミナリヨが建つ
- 一五八二年 天正遣欧使節が長崎を出発
- 一六一四年 江戸幕府が全国に禁教令を発令
- 一六二七年 島原・天草一揆が始まる
- 一六三八年 島原・天草一揆が終結する

島原半島

島原半島の南端に位置する口之津の港に初めてポルトガル船が入港したのは、

平戸から後れること十七年後の一五六七年だった。

大名によるキリスト教の保護のもと、多くの領民が受洗したものの、やがて国をゆるがす大事件が勃発する。

海を望む廃城に集結した市井のキリシタンたちは、何を願い、守り抜こうとしたのだろうか。



青銅製箱型 十字架

十六世紀後半―十七世紀前半
表面に星、茨冠、金つち、釘抜きなど「受難の道具」の模様が描かれた聖遺物を取るための容器。両面ともに背景には、「魚子文様」と呼ばれる細かい斑点状の細工が施されている。
(有馬キリシタン遺産記念館所蔵)

受洗した晴信 セミナリヨと原城跡

有馬晴信の受洗を機に、キリスト教の布教が急速に広まった島原半島。全国に点在するキリシタン墓碑のおよそ八割が集中していることから、多くの領民がキリスト教を信仰していたことが分かる。

南島原市は、世界文化遺産「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産のひとつ原城跡を擁するまちだ。かつて晴信が居城とした日野江城下には、修道者育成の中等教育機関「セミナリヨ」が開設され、ここで学んだ四人の少年たちが、長崎の港からヨーロッパへ渡った。輝かしい功績を手し、約八年半の旅を終えて帰国した四人だったが、待っていたのは伴天連追放令が発布された後のキリシタンへの逆風だった。その後の有馬晴信の失脚、徐々にエスカレートしていったキリシタンに対する弾圧、藩主松倉勝家による重税と圧政、そして飢饉。国内のキリシタン弾圧を加速させる引き金に

なったといわれる島原・天草一揆は、様々な要因が重なった末に、蜂起せざるを得なかったキリシタンたちの戦いだった。

出土品から読み解く 島原・天草一揆

一九九二年に始まった発掘調査によって、原城に立てこもっていた一揆勢の遺骨やキリシタン信仰用具などが多数出土している。有馬キリシタン遺産記念館では、原城築城や一揆の様相を明らかにする貴重な出土資料や歴史資料を展示。弾圧が始まる以前の西洋とのつながりや、信仰

遺産記念館

Arima
Christian
Heritage
Museum



有馬キリシタン遺産
記念館

有馬キリシタン

光から影の時代へ
移り変わった
島原半島のキリシタン史





発掘調査状況の一部を型取りし、再現したレプリカ(実物大)。本丸への最初の入口になる正門付近にあり、調査前は石垣がまったく見えない状態だった。一揆が終息した直後に二度と拠点にならないよう、幕府軍が破壊したと思われる。キリシタン遺物や人骨が出土している。



有馬晴信木像(複製)

の歴史も詳しく紹介している。

「大切に持っていた信仰用具とともに最期を迎えたのでしょう。遺骨のそばからは、メダイや十字架が出土しています。その一方で、すべての一揆勢が篤い信仰心を持って、籠城していた訳ではなかったようです」と学芸員の中山和子さん。一揆勢が幕府側に放った矢文には、次のような文面が綴られており、なぜ彼らが蜂起しなければならなかったのか、切迫した状況を窺い知ることができる。

上様のご意見であれば、永代キリシタンを捨てることには間違いはございません。(中略) 本来、弓矢を手に取り戦うことは、百姓のすることではありません。長門守(松倉勝家)の政治はあまりにひどく、このような理由から、やむを得ず蜂起したものです。

※現代訳より抜粋

最終的には兵糧攻めを仕掛け、総大将の天草四郎を含む一揆勢をほぼ全滅させた幕府軍。農民を相手に長



日野江城跡出土品・金箔瓦



日野江城跡出土品・中国の陶磁器(法花)



草木が青々と茂り、対岸に天草諸島を望む原城跡。かつてここを砦にしながら、平穏な暮らしを求めて散っていった人たちがいた。資料を通じて彼らの死闘を知れば知るほど、切なさが胸に込み上げてくる。

※令和八年度中に新たなガイダンス施設をオープンします。ご来館の際は、事前にお問い合わせください。



有馬キリシタン遺産記念館

南島原市南有馬町乙1395
TEL.0957-85-3217
開館時間/9時~18時
休館日/木曜、12月29日~1月3日
入館料/大人300円、
高校生200円、小中学生150円

南蛮船



龍の飾り瓦



原之城乗吟味帳



収蔵品

Collections

原城本丸から発掘
形なき城跡が伝える
キリシタン信仰の姿



メダイ

十六世紀後半―十七世紀前半
キリスト教の聖品として、聖母マリア
やキリストなどが描かれた金属製の
メダル。ポルトガル語の「Medalha」
が語源と考えられている。原城跡か
ら出土したメダイは主に真鍮製。す
べて楕円形で、横岡縁部と下縁部に
突起物が付くものと付かないものに
分けられる。

鉛製の十字架

十七世紀前半

籠城していた一揆勢が、火縄銃
の鉛弾を溶かして作った十字架
と考えられている。原城跡から
出土した十字架は、ロザリオに付
属するものが主体となっている。



火縄銃の銃弾

十七世紀前半

原城跡から多数出土しており、
鉄製も一部にはあるものの大半
は鉛製。未使用のものや実際の
使用を示すように平たく潰れ
たもの、変形したものが出土し
ている。



十字架

十六世紀後半―十七世紀後半

通常、十字架の紐孔は縦軸の上部にあるが、この十字架は下部に穴があけられている。キリタン時代の十字架はロザリオに付く十字架と吊し用の十字架があるとされ、ロザリオに付く場合は上下が逆方向になる。この十字架もロザリオに取り付けられて使用されていた可能性がある。



花十字紋瓦

十六世紀末―十七世紀初

特徴はキリスト教を象徴する花十字文様。当時のキリタンは、聖性を帯びた遺物として認識し信仰用具として使用。「揆勢が原城に持ち込んだと思われる。長崎、島原半島、大村などを各地で出土している。



砲弾

十七世紀前半

島原・天草一揆の際に使用されたとと思われる。幕府軍の記録には、江戸から大量の武器や弾薬を送ったことが記されており、原城に向けて激しい砲撃や射撃が行われたことが分かる。





原城 包围陣型図

江戸時代前期 近藤氏所蔵
寄託 南島原市教育委員会
島原大立一揆勃発から原城落
城までを描いた絵図 平戸藩主
が描かせたものと思われる。本
丸部分には、益田四郎家の記
述があり、一揆勢の益田大將益田
四郎(大井四郎)がいたことが分
かる。また、蓮池付近には、一揆
勢が投げたと思われる臼や茶わ
ん鍋の絵が描かれている。

原城跡

原城は、一五九九年頃から一六〇四年頃にかけて、有馬晴信によって築かれた城郭。本丸は石垣に囲まれ、織田信長や豊臣秀吉の時代に流行した石積み技術が用いられていたが、有馬氏に代わって新しく領主となった松倉氏が島原へ居城を移し、原城は廃城となった。現地では、本丸跡の一部をVRで再現。スマートフォンを利用して当時の様子を体験できる。





受け継がれる心 ⑤

南島原からローマへ 歴史をたどる 現代の天正遣欧使節

その昔、セミナリヨが置かれたとされる場所は、現在の南島原市北有馬町にあたる。南島原市では、二〇一二年から地元の中学生を対象にセミナリヨの授業を再現している。授業を体験した中学生の中から四人をイタリアへ派遣。バチカンを訪問する際には、四百年以上前に少年たちが身につけていた装束と同じかたびら姿になり、ローマ教皇にも謁見するという。

十二月、北有馬のまちは戦国時代のクリスマスを再現するイベント「フェスティビタス ナタリス」とともに華やかな光に彩られる。天正遣欧使節を含む行列が松明を手に練り歩く「南蛮行列」、巨大クリスマスツリーの点灯式など、手作りの祭りを通じてふるさとの歴史が語り継がれている。
(撮影協力：南島原市冬のお祭り実行委員会)



受け継がれる心 ⑥

戦いの中で 生まれた具雑煮は 今や、郷土の誇り

島原の郷土料理といえば「具雑煮」。丸餅、白菜、ゴボウ、シイタケ、かまぼこ…と、色とりどりの具材がひしめく一品は家庭料理として、またおもてなし料理として親しまれている。

具雑煮の発祥は「島原・天草一揆」といわれている。圧政、凶作、飢饉に苦しんでいた島原・天草の人々は一六三七年、三方を海に囲まれた原城に立

て籠もった。その数、三万七千人。彼らはわずか十五歳の天草四郎のもと、八十八日間にわたって籠城を続けた。この時、様々な食材を煮炊きして作ったのが具雑煮の始まりだといわれている。皆に愛される郷土の味は、命懸けの戦いの中で人々の心を温めた特別な料理であった。

撮影協力：元祖 具雑煮 姫松屋(島原市)





雲仙地獄

長崎と上海を結ぶ航路が開かれていた明治末期から昭和初期にかけて西洋人に人気の避暑地でもあった雲仙温泉街。雲仙地獄はその中心部に位置し、大叫喚地獄やお糸地獄、清七地獄など三十余りの地獄からなる。江戸時代にはキリシタン殉教の舞台となっていたことから、殉教碑も建立されている。

南

島原市で近年、注目されているオルレ。韓国・済州島の言葉で「通りから家に通じる狭い路地」という意味を持つオルレは自然を身近に感じ、自分のペースで楽しみながら歩くのが魅力のトレッキングのこと。地図を見なくても矢印やリボンを目印に歩くことができるため、いつでも誰でも楽しむことができる。

スタートは、気持ちの良い潮風が吹く口之津港。口之津港は一五六二年に領主・有馬義直によって貿易港として開港以来、キリスト教布教と南蛮貿易の中心として栄えた歴史を持つ場所。港にはポルトガル船で口之津港に來航し、有馬のセミナリヨ設置や天正遣欧使節の派遣などに尽力したヴァリニャーノ神父の銅像が建っている。



港を出て、昔ながらの商店街や住宅街を歩く。今回一緒に歩いてくれるのは

南島原オルレ

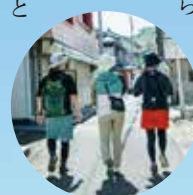
潮風を感じながら
絶景に出会う

野田堤は16世紀後半に造られた人工のため池。この辺りは、畑のあぜ道を歩いて進んでゆく。

素朴さと
雄大さを感じる
癒しスポット

中尾春菜さん。福岡県から南島原市に移住して十九年、まさにこの地域に魅

せられた人だ。「この先から道が狭くなりますよ」と中尾さんが指さす方は、案内されなければ分からないような細い路地。こうした普段は出会えないような道を歩くのもオルレならではの。



住宅街から山道へと入り、どんどん上ってゆく。すると突如目の前が開けた。畑の広がる先には、野田堤と烽火山。前半の見どころのひとつだ。標高約九十メートルの烽火山の頂上には、平安時代に大宰府に外敵などの情報を伝達する手段としてののろし釜が整備されたという。「秋にはこの辺りは一面レタスが植えられ、きれいですよ」と中尾さん。ポルトガル船が渡ってきた海とかつて烽火が上げられた山、そして手入れされた畑。そこには連綿と続く人々の営みがまるで一枚の絵のように広がっていた。

営みに
出会う
旅 ③



あこう群落



幻の野向の一本松



分岐点には目印となる木製の矢印がある。

海が見える家で犬と猫を
飼い、家庭菜園を楽しん
でいると話す中尾さん。
「それに加えて近所を
散歩すれば、オルレ
コースになるほどの
絶景が広がっている。
本当に豊かな暮らし
です」。



者の方の荷物を持つなど、私にとっては当たり前
のことをした時に、この土地の方言で『ためになっ
た』、つまり『助けになった』と感謝されることが
多く、必要とされたことを嬉しく思いました。南
島原って、自分が知らない人でも自分を知ってい
たり、誰かを通じて知り合いになっていたりす
るんです。それが私にとっては面白かったですね。
温かくて、皆と繋がっている感じがします」。

中尾さんは現在、南島原への移住を検討してい
る人のサポートをする移住コーディネーターの仕
事をしている。「島原半島はかつて島原・天草一揆
によって多くの人が亡くなりました。その後、こ
の半島には全国のいろいろな場所から人々が集ま
り、半島の半分は「よき者」が暮らすまちなりま
した。そう考えると、島原半島は移住の最先端を
いく場所なんです」。

営みに
出会う
旅 ③

コ
ースの中には様々な絶景
ポイントがあるが「幻の
野向の一本松」もその一つ。昔は
大きな古い松の木があったそうだ
が、今は残念ながら枯れてしまい、
その代わりに桜が植えられている。
ここからは遠くは天草の島々まで
見渡すことができ、写真スポット
としても人気だ。

次は海沿いを目指して歩く。瀬
詰崎灯台からの景色を堪能した後
に出会ったのは、あこうの群落。
樹齢三百年を超えるという巨木は、
思わず手を合わせたくなるような
神聖な雰囲気をもっており、歩
き疲れた身体にサラサラという葉音と木陰が実
心地良い。

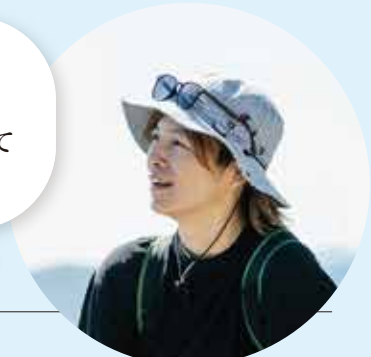
二十本ほどが立ち並ぶあこうの木の下には早
崎漁港がある。中尾さんは「実は私の自宅はこの
すぐそばで、この漁港にはよく仕事終わりに釣
りをします。近所のおばあちゃんた
ちと晩ご飯を釣るんですよ」と笑う。

仲の良い友人に会うために足を運ん
だのが南島原にきた最初だったと話す
中尾さん。「移住の決め手は、皆が受
け入れてくれたことです。例えば高齢



瀬詰崎灯台

南島原の人たちは
皆フレンドリーで、
すぐに仲良くなって
しまいます。



中尾春菜さん

オ

ルレではアスファルトの道だけでなく、畑のあぜ道や山道など、様々な道を歩くのも楽しみの一つだが、南島原ではさらに玄武岩の海岸もコースに組み込まれている。真つ黒な溶岩の石だたみは、およそ四百三十万年前に海底火山の噴火により島原半島が誕生した場所だそう。世界ジオパークに認定された島原半島ユネスコ世界ジオパークでも主要な見どころの一つになっている。まさに大自然を体感できる場所だ。

玄武岩の海岸から今度はまた山の方へと上る。畑と海が広がるのどかな道を歩いて行つた先に見えるきたのは、白亜の灯台。

一八八〇年に建てられた口之津灯台は小さくて、なんとも可愛らしい佇まいだ。この辺りはどこか海外を思わせる風景が続くと思っていたら、中尾さんがこう教えてくれた。

営みに
出会う
旅 ③



山あり海あり！
絶景続きの
最高のコースだね。



「南島原の中でも特に口之津の早崎地区には、世界中をまわっていた船員さんが多く暮らしています。ですから住宅に関しても外から見たら日本家屋なのに、一部屋だけシャンデリアや暖炉がある、そんなオシャレな家がよくあります。おじいちゃんたちは日本茶じゃなくて、コーヒーとチョコレートを嗜む、それが口之津の文化なんです」。

さらにオルレの魅力をこう話す。「このコースを歩くと、口之津の魅力がぜんぶ分かります。海があり、山があり、畑があり、季節の花や実に出会う。そして美しい風景を見ながら、誰かとおしゃべりして歩く。オルレは本当に楽しいですね」。

南島原では春と秋の年に二回、道々で地域の人たちのおもてなしを受けながら歩くイベントも開催している。地元の人たちと交流しつつ歩く、ひと味違ったオルレも人気だ。



なんばん大橋

玄武岩の海岸は潮が引いている時間帯は、さかじに石だたみが広がって、より雄大な景色を望むことができる。



九州オルレ南島原コース
問い合わせ TEL.0957-73-6633
南島原市地域振興部商工観光課

キリシタン時代の
原風景が残る

長崎市

外海地区



History

一五七一年	外海にキリスト教が布教される
一六一四年	江戸幕府が全国に禁教令を発令
一六三七年	島原・天草一揆が始まる
一七九七年	大村藩と五島藩の間に農民移住の協定が成立
一八六五年	信徒発見
一八八二年	ド・ロ神父が出津教会堂を建設

急峻な地形を縫うように延びる

国道二〇二号を進むとのどかな風景が広がる。

ここはかつてキリシタンたちが密かに祈りをつないだ場所。

様々な苦難に見舞われながらも信仰を守り抜いた人たちが

新天地を求めて海を渡った人たちがいた。

彼らが見ていた夕陽は、今もなお大海原を美しく照らしている。

そしてキリシタンの里の営みを見守っている。



イナッショ様

十七世紀以降

長崎市外海歴史
民俗資料館所蔵

イナッショ様は、イエズス会の創始者の一人、イグナチウス・ロヨラのころ、潜伏期には、このような人物像をキリスト・マリア、聖人などに見立てて信仰用具にした。飄箆を腰に下げて踊るユニークな姿から、もともとは中国の仙人などを象ったものと考えられている。

長崎市 外海歴史民俗 資料館

Sotome
Museum
of
History and
Folklore

外海から五島へ
海を渡ったクリシタンたち

長崎市
外海歴史民俗
資料館



祈りを後世につないだ 独自の信仰形態

美しい海岸線に沿って集落が点在している外海地区。かつては山々が行く手を阻んだこの地にも、禁教期に信仰を守り抜いたクリシタンたちがいた。野山を切り開き、畑を耕しながら生活していたクリシタンにとって、信仰との深い結びつきは、心の安寧につながっていたのだろうか。二百年以上にわたった禁教期には、耕す土地がなくなるほど人口が増加した時期があり、大村藩と五島藩の主導による開拓移民政策をきっかけに、多くのクリシタンが五島列島などへ移住した。

外海歴史民俗資料館は出津集落にある。旧外海町の時代から収集されてきた幅広い資料を通じて、外海地区の歴史や文化を紹介。かくれクリ



シタン信仰の様相を伝える貴重な資料も多く含まれており、その中には宣教師が不在になった後、信仰を続けるために使われたキリシタン暦「日繰り帳」など、平戸・生月のかくれキリシタン信仰には見られないものも少なくない。ひとくくりにはできない、信仰の奥深さにふれることができるだろう。

ほかにも、十八世紀はじめに大村藩主が西彼杵半島一帯で栽培させたといわれる、サツマイモや加工品のカンコロにまつわる解説など、五島列島とのつながりを感じさせる展示も特色の一つ。現代に残された資料から、海を隔てて響き合うキリシタンたちの想いが見えてくる。



長崎市 外海歴史民俗資料館

長崎市西出津町2800
TEL.0959-25-1188
開館時間/9時~17時
休館日/12月29日~1月3日
入館料/一般310円、小中高生100円
※ド・ロ神父記念館の入館料含む



オラシヨ本
「今地里さん」
(こんちりさんのりやく)
一六〇三年 ※昭和時代写本
浦上外海・五島列島・天草で伝承されたオラシヨ本の一つ。「こんちりさん」とはポルトガル語で「告解」を意味する。神父不在の中、このオラシヨを唱えることで罪が赦されると考えられた。

収蔵品

Collections

外海系

かくれキリシタンの
実像を伝える

バスチャンの椿

一八五六年以降
バスチャンは、禁教を境に不在になった外国人宣教師の代わりに、キリシタンを指導した日本人伝道師、浦上三番崩れの際に、バスチャン由来の椿の木が伐採されると噂されたため、事前に切り取って家々に分配された。



シタマルヤ

(サンタ・マリア像)

十七世紀~十九世紀
三重地区・熊山のかくれキリシタンの帳方の家に伝承。帳方の一族や近隣の信者が、サンタ・マリア像として信仰していた観音像で、両手が欠損している。帳方とは組または帳と呼ばれる、かくれキリシタンの組織の最高指導者のこと。かつて外海には、組あるいは帳が八つ以上あった。



受け継がれる心 ⑦

素朴な味わい 大地を耕して育んだ 伝統の保存食

やせた土地でも、栽培しやすいといわれるサツマイモ。近年は品種が増えて、スイーツとしての人気も高まっている。しかしもともとは、庶民の暮らしを支える日常食。外海地区など西彼杵半島の日当たりの良い畑でも、古くから栽培されてきたといわれている。

長崎では、サツマイモを薄くスライスしゆでて、天日で乾燥させたものを「カンコロ」と呼ぶ。素朴ながらも、甘みが凝縮したカンコロは長期保存が可能。保存食として重宝される。

また、五島列島や西彼杵半島などの各地域では、蒸したもち米にカンコロと砂糖を加えて、カンコロ餅を作る風習が残っている。ふるさとの食文化は、先人たちの暮らしの智慧から育まれたもの。大切な宝である。

撮影協力：出津農楽舎



出津教会堂の屋根の上に立つマリア像は、ド・ロ神父がフランスから取り寄せたものだという。

営みに
出会う
旅 ④



ド・ロ神父の愛が語り継がれる

出津集落をめぐる

ド・ロ神父はまず教会を建て、教会を中心とした村づくりを始めることとした。

一八八二年に完成した出津教会堂はド・ロ神父自らの設計によるもの。風の強い斜面の台地に立つ教会堂は低平でどっしりとしながらも、優美さをたたえている。

折りの場をつくったド・ロ神父が次に手掛けたのが、救助院の設立である。教会のすぐ下では、かつてのイワシ網工場、マカロニ工場、薬局が並ぶ旧出津救助院を見学することができる。その中でも象徴的な建物が授産場だ。当時、外海地区には海難事故や病気で夫や息子を亡くした妻や母が多く、授産場はそうした女性たちや若い女性たちの自立を支援するために建てられた。ここではド・ロ神父の導きのもと織布、編み物、素麺、マカロニ、パン、茶、醤油や味噌の醸造など、様々な授産事業が展開され、女性たちは信仰とともに生活の糧を得たのだった。

禁 教期、多くの潜伏キリシタンが暮らした外海地区。海と山に囲まれたキリシタンの里は、作家・遠藤周作の心をつかみ、代表作『沈黙』の舞台となったことでも知られている。美しい夕陽が沈むことから「ながさきサンセットロード」とも呼ばれる国道二〇二号を走れば、眼下には紺碧の角力灘（すもうなだ）そしてその向こうには、潜伏キリシタンたちが夢見た五島列島が今も同じ姿で浮かんでいる。

一八七九年、一人の宣教師が主任司祭として外海の地に赴任した。その人の名はマルク・マリイ・ド・ロ神父。すべての私財を投じ、生涯をかけて外海の人たちに寄り添い続けた愛の人だ。

赴任して最も驚いたことは、田畑に恵まれない厳しい自然環境の中で人々が信仰だけを頼りに貧しい暮らしをしていたことだった。「魂の救済だけでなく、その魂が宿る人間の肉体、生活の救済が必要」と痛感したド・





ド・ロ神父から
贈られた
美しい音色

ド・ロ神父の設計による授産場の建物は当時のまま残されている。見上げると、フランスから取り寄せた鑄鉄製の金物や鉄のボルトが見え、この建物が西洋と日本の技術の融合で出来ていることが分かる。



神父考案のカンコロ切り機や素麺延し機といった自作の機械もあり、生産性向上のために様々な工夫をしていたことが伝わってくる。

フランスの貴族の家に生まれたド・ロ神父は幼い頃より高い教育を受け、農業、印刷、医療、土木、建築…と、多岐にわたる技術を身につけた。そして、そのすべてを外海地区の人々のために使った。赤

出津教会堂の献堂を祝して贈った「ハルモニウムオルガン」と呼ばれる、当時最先端の高級オルガン。一九六八年まで、毎日のミサで使われていたという。「今も弾くことが出来るんですよ」と赤

営みに
出会う
旅 ④



ド・ロ神父は日々の記録を金銭の出し入れを中心に、日誌形式で記入していた。こうした日誌が19冊残っているという。文字に几帳面さがうかがえる。



日本で初めてバスタが作られたマカロニ工場。当時、ここでは長崎の居留地に暮らす外国人からの注文を受けて、ド・ロ神父のレシピで女性たちがマカロニを製造していた。

すべては
かよわき人々のために……



ド・ロ神父像

イ
ワシ網工場として建
てられた建物は現在、

「長崎市ド・ロ神父記念館」にな
っており、神父にまつわる
あらゆる物が展示されている。
印象に残ったのは、神父考案
の洋式作業衣。フランス風の
デザインを取り入れた作業衣
は機能的でありながらオシャ
レで、これを着て立ち働く救
助院の女性たちも嬉しかったの
ではなからうかと想像できる。
赤窄シスターは、ド・ロ神
父は厳しくも明るく、楽しい
方だったようだと言います。「神



集落でよく見られる壁は
赤土に石灰を混ぜたも
のを接合材として用いて、
地域で産出される岩を
積み上げた丈夫なもの。
ド・ロ神父が考案したこと
から「ド・ロ壁」と呼ばれ、
親しまれている。

父様が亡くなって百年近くが
経ち、直接関りをもった方は
いらっしやいません。ただこ
の地域には、先祖から神父様
のお話を聞いて育った人たち
がいます。その方たちの話を
聞いていると、皆が神父様に
対して限らない感謝をしてい
ることが伝わってきます」。

授産場の二階には、三体の
御像が飾られている。その内
の一体、幼子を抱いた像は
ド・ロ神父がフランスから日
本へ渡る際に、自ら持参した
ものだという。「この御像の
方は子どもたちのための施設
をつくった司祭として知られ
ており、ド・ロ神父が大変尊
敬していた方だと聞いていま
す」。ド・ロ神父は若き日に決
意した「かよわき人々のため
に」という思いを亡くなるま
で貫いた。二十八歳で来日し
た彼はその後、一度も故郷の
土を踏むことなく、七十四年
の生涯を閉じるまで、人々の
ために尽くした。ド・ロ神父
は今、自身が九年の歳月をか
けて外海の信者たちのために
造った共同墓地に眠っている。

旧出津救助院

長崎市西出津町2696-1 TEL.0959-25-1002
開館時間／火～土曜9時～17時（最終受付16時30分）、
日曜（8/15、11/7、12/25）11時～17時
休 館 日／月曜（祝日の場合は翌日）、12/29～1/3
入 館 料／大人400円、中高生250円、小学生200円

長崎市 ド・ロ神父記念館

長崎市西出津町2633 TEL.0959-25-1081
開館時間／9時～17時 休館日／年末年始（12/29～1/3）
入 館 料／大人310円、小中高生100円

出津教会堂

長崎市西出津町2602
TEL.095-823-7650（インフォメーションセンター）
※見学は事前連絡が必要です。
インフォメーションセンターのホームページよりお申込みください。
（<http://kyoukaigun.jp>）



ド・ロ神父考案の救助院の制服
（長崎市ド・ロ神父記念館所蔵）



ド・ロ神父がフランスから持参した貧者の父・ウィンセンシア・パウロ像
（長崎市ド・ロ神父記念館所蔵）

関連資産
外海の大野集落

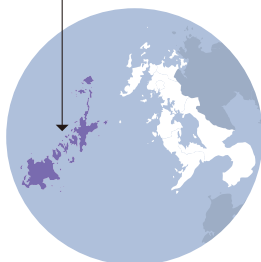
大野教会堂

ドロ神父が一八九三年に建設した小規模な巡回教会。この地方の伝統的な民家建築の技術と西洋技術を融合した建物は、見ごたえがある。地元産の石を、赤土に石灰を混ぜた漆喰で固めた「ド白壁」を、北側の玄関前に設置して風よけにしている。



心安らぐ
祈りの島

五島列島



History

- 一五六六年 五島にキリスト教が伝来。五島最初の教会が奥浦に建つ
- 一五九七年 二十六聖人の一人、五島出身のヨハネ五島が西坂の丘で殉教
- 一六一四年 江戸幕府が全国に禁教令を発令
- 一七九七年 大村藩の農民が福江島の六方の浜に上陸する
- 一八六八年 久賀島の牢屋の窄事件から五島崩れが始まる
- 一八七三年 キリシタン禁制の高札が撤去される

五島列島

長崎港の西方百キロメートルに浮かび、大小百五十二の島々からなる五島列島は、日本と大陸が交易を行っていた時代から、重要な中継基地の役割を果たしてきた。雄大な島に迎え入れられてきたたくさんの人々。その中には、外海から移住してきたキリシタンもいた。

ハンタマルヤ
(サンタ・マリア像)

十七世紀

堂崎天主堂キリシタン資料館所蔵
寄託：五島市

明末から清初めに製作された中国・徳化窯の白磁の像。病弱だった奈留島のかくれキリシタンが、本像を入手し拝んだという。「マリア観音」と一般的に知られる像は、潜伏期にはハンタマルヤ(サンタ・マリア)と称され外海や五島列島に伝わった。浦上三番崩れの没収品(長崎奉行所旧蔵品)の中にも多数見られる。



信仰をつないだ 外海の移住者たち

“祈りの島”として知られる五島列島には、五十余りのカトリックの教会堂が存在する。島民の六人から七人に一人がカトリック信徒といわれ、豊かな自然と島内でたびたび出会う教会堂が織りなす素朴な美しさに息をのむ。

五島列島にキリスト教が伝来したのは一五六六年。フランシスコ・ザビエルが鹿児島へ上陸してから、すでに十七年の月日が経っていた。なぜ宣教師たちは、この遠く離れた島にやってきたのだろうか。キーパーソンとなったのは、当時五島地域を治めていた宇久純定^{うくすみさだ}だった。西洋医療に関心があった純定は宣教師たちと接触。やがて医師でもある宣教師ルイス・デ・アルメイダと日本人修道士ロレンソ了齋が島に招かれ、布教が広まるきっかけになったといわれる。その後キリシタン大名が生まれ二千人以上の島民が受洗したが、穏やかな島々にも禁教の波が押し寄せる。

禁教を境に一旦途絶えたとされる五島のキリシタン信仰は、外海から海を渡つ

てきた人々によって復活を遂げた。一七九七年、最初の移住者がたどり着いたのは、福江島にある六方^{むかた}の浜だった。そのほとんどが潜伏キリシタンだったといわれ、農耕などで生計を立てながら密かに祈りを続けた。また、移住した人たちに土地が与えられたことを知ると、外海地方からの移住者は続々と増え、その数は三千人以上にのぼったといわれている。

多様な歴史を

福江城の城跡で学ぶ

時は流れ江戸時代後期。異国の船が五島灘を往来するようになると、幕府が海岸防衛のために許可を出したことから、五島氏は念願だった福江城（石田城）を築城した。三方を海に囲まれた立派な海城は、場内に台場（砲台）が設けられたという。しかし、築城からわずか九年、明治維新に移行すると城郭解体の指令が出される。

かつての城郭内に佇む五島観光歴史資料館は、福江港から徒歩十分の距離に位置する。お堀の向こうに見える天守閣を模した建物には、五島列島におけるキリ

資料館

Goto
Kanko
History
Museum

五島観光歴史

異なる文化や風習が
万華鏡のように混ざり合う



五島市
五島観光歴史
資料館

収蔵品

Collections



五島列島に伝わる
かくれキリシタンの信仰用具

裂(布)

年代不明

堂崎天主堂キリシタン
資料館所蔵
寄託・五島市

外海や五島では、死者にハスチヤンの櫛の木片を削ったものや、聖人等の着物の一部とされる裂(布)の糸を抜きお土産として持たせた。裂には夏物の麻素材と冬物の綿入れがあり、季節に応じて使い分けられたという。五島では、赤く染めた麻布を「二十六聖人の御ころも」としていたといわれている。



五島キリシタン史展示コーナー



五島観光歴史資料館

五島市池田町1-4
TEL.0959-74-2300
開館時間／9時～17時
(6月～9月は18時閉館)
※いずれも最終入館は30分前まで
休館日／12月29日～1月3日
入館料／
一般300円、小中高生100円

シタン信仰の歴史に加えて、古代の暮らしや五島の遺跡、遣唐使と倭寇、五島藩にまつわる解説など、主に福江島に関する幅広い資料を展示。福江城があった頃の町並みを再現した模型もある。当時の石垣を除いて、幻のように姿を消してしまった海城の雄姿をイメージすることができらう。

近年、福江島は若い人たちに人気の移住先としても注目されている。五島観光歴史資料館の館長・松崎義治さんは、そんな福江島の特徴について「小さな島の中で長い時間をかけて醸成されてきた異なる宗教や文化、風習がまるで万華鏡のように混ざり合いながら存在しています」と語る。「当館でも福江島や五島列島の特徴を凝縮して紹介しています。万華鏡をのぞくように楽しんでいただきたいと思いますね」。



アワビ貝

幕末以降

堂崎天主堂キリシタン資料館所蔵
寄託：五島市

五島市浦頭のかくれキリシタンの組織が所有していたもの。アワビ貝の内側の凹凸に聖人の姿を見出し、いたと伝承があり、新上五島町の有福の組織でも同様の事例があるが、外海では確認されていない。一方、天草市崎津にはアワビ貝を聖人に見立てた事例があり、五島列島と天草地方の信仰上の関係性を示唆するものとして研究対象とされている。



日繰り帳

幕末以降

堂崎天主堂キリシタン
資料館所蔵
寄託：五島市

外海や五島のかくれキリシタンが活動の中心に置いていた信仰暦。この資料は五島市平蔵町南河原のもの。外海では日本人伝道師バスチヤが、宣教師ジワシワから日の繰り方を習ったという伝承から「バスチヤン暦」とも呼ばれる。



誕生仏

江戸期か

堂崎天主堂キリシタン資料館所蔵
寄託：五島市

新上五島町の有福に伝承。外海や五島では、様々な形態の仏像等を聖人に見立てていた。

藩政時代の痕跡と

郷土ゆかりの人物

白濱微氏筆 犬の絵

一八九二年
五島市指定有形文化財
福江小学校所蔵 寄託・五島市
五島藩の家老だった白濱久太夫の
長男として生まれた白濱微氏は、
日本における美術教育研究の基
礎を築いた人物。この絵は、青年時
代に描き母校の福江小学校に寄
贈したもの。



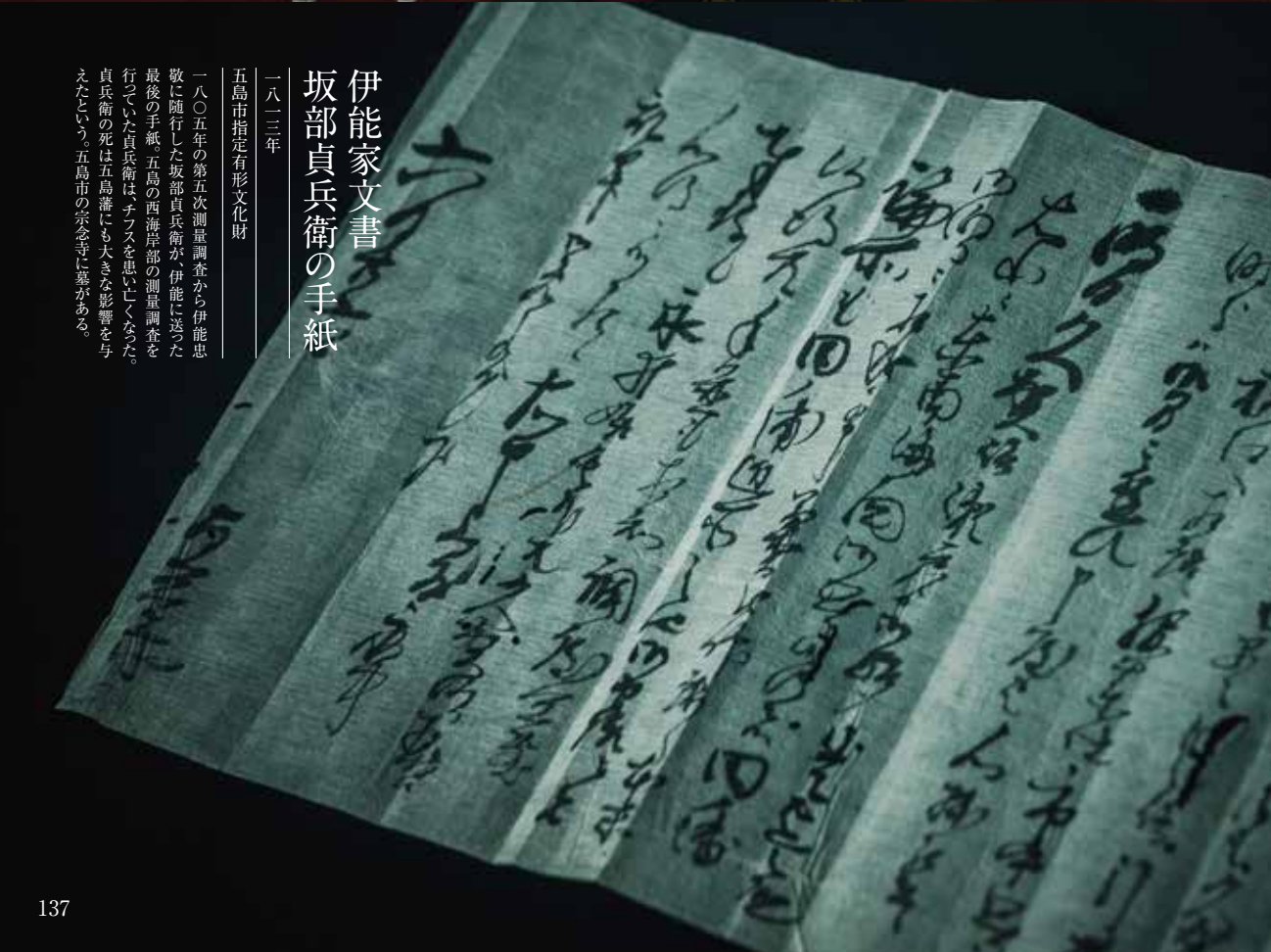
袴 衣桁

年代不明
五島藩ゆかりの資料。五島家
の始祖は、源平の乱を避けて
五島列島最北端の宇久島に
渡り、領主となった宇久家盛
と伝えられている。



伊能家文書 坂部貞兵衛の手紙

一八三三年
五島市指定有形文化財
一八〇五年の第五次測量調査から伊能忠
敬に随行した坂部貞兵衛が、伊能に送った
最後の手紙。五島の西海岸部の測量調査を
行っていた貞兵衛は、チフスを患い亡くなった。
貞兵衛の死は五島藩にも大きな影響を与
えたという。五島市の宗念寺に墓がある。



受け継がれる心 ⑧

堂崎天主堂 美しい海岸を望む 開かれた聖域

禁教の高札が撤去された四年後、五島を訪れたフランス人宣教師フレノ、マルマン両神父。堂崎天主堂のはじまりはマルマン神父が建てた小聖堂だった。その後、二代目の主任司祭となったペルー神父が用地を拡張し、現在の赤レンガ造りの新聖堂が完成。信徒の皆さんによって大切に守り継がれてきた祈りの場は、キリシタン資料館としても公開されており訪れる人々を広く迎え入れている。

館内には二十六聖人殉教者の一人、聖ヨハネ五島の聖骨を展示。西坂の丘からマニラに運ばれ、その後マカオに分骨されていたものを、プティジャン神父が大浦天主堂にもたらしたという。五島の地に聖骨が帰ってきたのは、この資料館が開かれたとき。長い旅を終えてふるさとにたどり着いた。

堂崎天主堂キリシタン資料館

五島市奥浦町2019 TEL.0959-73-0705
開館時間／9時～17時(11月11日～3月20日は16時閉館、
夏休みは18時閉館※8月13日～15日は17時まで)
休館日／12月30日～1月3日
拝観料／大人300円、中高生150円、小人100円



久賀島を訪ねて

小さな島にあふれる
語りつくせない歴史

福

江島から高速船や
フェリーで約二十分。

五島列島のほぼ中央に浮かぶ久賀島は馬蹄のような独特な形をしており、その中心には波穏やかな久賀湾が広がっている。久賀島は五島列島の中でも三番目に大きな島でありながら、人口はわずか約二百七十人と、とても静かな島だ。

島では潜伏キリシタンの歴史が語り継がれている。はじまりは十八世紀後半、五島藩が積極的に久賀島に開拓移民を受け入れていることを知った潜伏キリシタンの一部が島へ渡ってきた。彼らは在来の仏教集落の住民と漁業や農業をともにしながら、二百年以上にわたって密かに共同体を維持し、自らの信仰を守り続けた。

島には潜伏キリシタンと在来の仏教集落の人々が協力して開拓した集落がある。その

一つ、大開集落を訪ねた。広

大な土地を開墾するためには多くの人手が必要だ。潜伏キリシタンたちは、必要な労働力としてこの地に迎えられたことだろう。彼らは先住民が開墾した水田の周辺の谷筋を開拓し、水利を共有するなどして生活を営んだという。緑が広がるのどかな風景にも、人々の生きる知恵を感じた。

島の中心である久賀地区には旅の情報を収集できる「久賀島観光交流拠点センター」があり、こちらでは休憩も可能。島唯一の武家屋敷造りの建物は趣があり、庭園も見どころの一つとなっている。

久賀島観光 交流拠点センター

五島市久賀町103・104
TEL.0959-77-2115
開館時間／9時～17時
休館日／
月曜日（祝日の場合は翌日）
※12/29～1/3、7～10月は
休館日なしで開館
観覧料／無料



久賀島観光交流拠点センターでは、五島うどんやコーヒーが楽しめるほか、10名以上なら島の食材が満載の和食をいただくことができる（5日前要予約、1名1500円）。



明治時代中頃に建てられた「旧藤原邸」を再利用した久賀島観光交流拠点センター。



水田が広がる大開集落。潜伏キリシタンたちは、この地で密かに共同体を維持した。久賀島はその美しい集落景観が高く評価され、島全域が国の重要文化的景観に選定されている。



久賀島の玄関口・田ノ浦港。



島内めぐりの前に立ち寄りたい「久賀島潜伏キリシタン資料館」。

営みに
出会う
旅 ⑤

江 戸幕府に続く明治政
府のキリシタン弾圧
により、一八六八年、久賀島
の信徒たちが捕らえられ、残
酷な責め苦を受けた。二百名
の信徒たちが押し込められた
のは、わずか十二畳ほどの牢
屋。彼らはそこで身動きする
ことを許されず、排泄さえも
その場で行わなければならな
かった。この迫害は八カ月に
もおよび、四十二名の信徒が
命を落とした。

牢屋があった場所には現在
「牢屋の殉教記念教会」が
建てられ、信仰の碑とともに
殉教者の名が刻まれた石碑が
並んでいる。椿の木に囲まれ
た小高い丘からは久賀湾を望
むことができるが、信徒たち
が真冬にさらされたと聞けば、
海の色が悲しみに染まってい
るように見える。

島には二〇一八年に「久賀
島潜伏キリシタン資料館」が
オープンした。そこで管理人
を務めている脇村富美子さん
は、先祖が殉教者の一人であ
ることを教えてくれた。「曾
祖母から聞いた話では、牢屋

の番人の中には優しい人もい
たそうで、空腹のため牢から
出してと何度も頼むと、『必
ず戻って来いよ』と言われ、
出してもらえたそうです。で
も外に出てありつけたのは、
畑の小さな芋の子。それを食
べて命をつないだそうで、曾
祖母はそのおかげでいま私た
ちは生きている、とよく話し
ていました。逃げ出すと、
さらにひどい責め苦を受ける
と思っただのか、彼らは皆、再
び牢屋に戻っている。久賀島
ではこれだけの迫害に遭いな

がらも、棄教した人はほとん
どいなかったという。

教会堂の階段を下ると、赤
や白の椿の絵が描かれた石が
並べられていた。これは脇村
さんの手によるもの。「島を
訪れた記念になるようなお土
産が欲しい」という声を聞き、
十年ほど前から海で拾ってき
た石に絵を描いて、販売する
ようにしました。最初は壮
絶な弾圧が行われた場所ゆえ
に足がすくむような思いだっ
たが、脇村さんはこう言っ
て笑う。「私にとってここは先
祖が眠る場所です。怖くは
ありません。信仰の原点であ
り、特別な場所です」。石の
上に咲く椿の花に、光を見た。

久賀島潜伏 キリシタン資料館

五島市久賀町412-2
TEL.0959-77-2788
開館時間／
9時～16時30分
休館日／年末年始
入館料／300円
※入館は事前連絡を。

牢屋の殉 教記念聖堂

五島市久賀町大開
TEL.0959-72-3957
(福江教会)
見学時間／
9時～17時



ここは先祖たちが眠る
信仰の原点

牢屋の殉教記念聖堂にて。

旧五輪教会堂



入口のステンドグラスは、2枚のガラス板の間に色付きのシールを貼りつけたもの。こうしたところに資金がなかった信徒たちの愛のある工夫が垣間見える。

営みに
出会う
旅 ⑤

浜脇教会



受け継がれた
聖なる祈りの場

さに陸の孤島といった感じが、当時の人々の移動手段が船であったことを考えると、そう不便な所でもないのかもしれない。旧五輪教会堂は外から見ると民家を思わせるような素朴な佇まいだが、一歩中へ入ると、全く異なる雰囲気。島の船大工たちが造ったといわれる三廊式板張りのリブ・ポールの天井やゴシック風の祭壇は教会建築の様式が見られ、厳かな空間が広がっている。

旧五輪教会堂が建てられたのは、牢屋の窄をはじめキリシタン弾圧時の殉教者の御霊を鎮めるためであったという以前、教会守を務めていたという脇村さんは、訪れた人に必ずこう説明したと話す。「この地で迫害を受けて亡くなった方々へのお祈りが染み込んだ教会です」。久賀島の人たちの暮らしは、今も祈りとともにある。

田 ノ浦のそばの丘に建つのは、五島初の鉄筋コンクリート造りの教会堂・浜脇教会だ。真っ白な教会堂は海からも見ることができ、周囲の山々とエメラルドグリーンとの海とのコントラストが美しい。

禁教の高札が撤廃されると、一八八一年、久賀島の信徒たちはこの地に木造の教会堂を建てた。現在の教会堂はその最初の教会堂の老朽化に伴い、一九三二年に建て替えられたものだ。

区に暮らす信徒たちだった。こうして初代の木造の浜脇教会は五輪地区に移築され、以来、五十四年にわたって地域の人々の祈りの場として、大切にされた。現在は新しい教会堂の隣で旧五輪教会堂として、国の重要文化財に指定されている。

旧五輪教会堂へは車を降りて、十分ほど山道を下る。まさに、十分に山道を下る。まさに、十分に山道を下る。まさに、十分に山道を下る。

旧五輪教会堂

五島市藤町993-11
TEL.095-823-7650
(インフォメーションセンター)
見学時間／火曜～日曜8時30分～12時、
13時～16時30分教会守駐在。
※月曜日と火曜日(隔週)は自由見学。
※見学は事前連絡が必要です。
インフォメーションセンターの
ホームページよりお申込みください。
(<http://kyoukaigun.jp>)

浜脇教会

五島市田ノ浦町263
TEL.0959-72-3957
(福江教会)
見学時間／
9時～17時

受け継がれる心 ⑨

五島自慢の魚は 小さくても 味は絶品なり

きびなごは、きれいな水の中でしか生きたいため、少しでも水から出すと死んでしまうという、鮮度が命の小さな魚だ。

五島では昔から盛んに漁が行われ、島の信徒たちは、きびなご漁で得た収入を教会堂の建設費用に充てたという。

きびなごの刺身「菊盛り」は、銀白色の帯がキラキラと光り、まるで芸術

品のように美しい。水揚げされたばかりのきびなごは身が締まっているため、骨から外れにくく、強い弾力がある。ゆえに菊盛りにするには手間がかかるが、味は格別。地元の漁師たちは仕事を終わりに、きびなごの刺身で一杯やるのが最高の朝ごはんだと頬を緩める。

旬は脂がのる秋から冬にかけて。五島に来たならぜひとも味わいたい逸品である。





構成資産
野崎島の集落跡

旧野首教会

外海から各地へ広がった潜伏キリシタンの一部は、神道の聖地であった島に開拓移住することによって、神社の氏子として信仰をカモフラージュしながら祈りをつないだ。旧野首教会は、集落に住む十七世帯の信者たちが、きびなこ漁などで蓄えた資金で建てた本格的なレンガ造りの教会。現在は教会としての役目を終えているが、「小値賀諸島の文化的景観」として国の重要文化的景観に選定されている。

構成資産
頭ヶ島の集落

頭ヶ島天主堂

外海から移住した潜伏キリシタンの中には、病人の療養地として人が近づかなかった頭ヶ島に移住先に選んだ人々がいた。解禁後はカトリックに復帰。禁教期における指導者の屋敷の近くに建てたのがこの天主堂だ。石材を使用することで建築費を抑えた信徒たち。白らの力で石を運び積み上げ、およそ十年の年月をかけて造り上げた。



江上天主堂

構成資産

奈留島の江上集落

(江上天主堂とその周辺)

外海からこの地に潜伏キリシタンが移住してきた頃は教会がなく、信徒の家でミサが行われていたという。本格的な教会が建築着工されたのは一九七七年。設計施工を担当したのは、教会建築の名工といわれる鉄川与助だつた。周辺に海や川があり湿度が高いことから、通気をよくするために床を高くした。





海外交流の

歴史と

キリスト教史

※主な出来事を掲載しています。

一五五〇年	平戸にポルトガル船が来航。ザビエル、平戸にて布教
一五六三年	大村純忠が受洗（日本初のキリシタン大名）
一五六六年	五島にキリスト教が伝来。五島最初の教会が奥浦に建つ
一五七一年	外海にキリスト教が布教される
一五七九年	巡察師ヴァリニャーノが口之津に来航
一五八〇年	大村純忠が長崎と茂木をイエズス会に寄進。 有馬晴信が受洗。有馬にセミナリヨが建つ
一五八二年	天正遣欧使節が長崎を出発
一五八七年	豊臣秀吉が伴天連追放令を発布
一五九七年	二十六聖人が西坂の丘で殉教
一五九九年	平戸でキリシタンが禁教になる
一六〇三年	徳川家康、江戸幕府を開く
一六〇九年	平戸にオランダ商館を設置

一六一四年	江戸幕府が全国に禁教令を発令
一六三七年	島原・天草一揆が始まる。総大将は天草四郎
一六四一年	平戸から長崎出島へオランダ商館が移転
一六四四年	国内最後の神父が殉教し、国内に不在となる。 以降、残された民衆は自分たち自身で信仰を続けることになる
一七九六年	大村藩と五島藩の間に農民移住の協定が成立
一八六五年	信徒発見、潜伏キリシタンが大浦天主堂でティジャン神父に信仰を告白する
一八六七年	浦上四番崩れが起こる
一八六八年	久賀島の牢屋の窄事件から五島崩れが始まる。 明治政府発足（明治元年）
一八七三年	キリシタン禁制の高札が撤去される
一八八二年	ド・ロ神父が出津教会堂を建設

※浦上四番崩れ、五島崩れ：江戸末期から明治初期にかけて起った、潜伏キリシタンに対する大規模な摘発事件。

参考文献・参考サイト

- 図録「信徒発見150周年記念事業　世界遺産推薦記念特別展　聖母が見守った奇跡～長崎の教会群とキリスト教関連遺産～」特別展「聖母が見守った奇跡」展実行委員会
- 図録「ローマを夢みた美少年　天正遣欧使節と天草四郎展」長崎歴史文化博物館編集・発行
- 図録「バチカンの名宝とキリシタン文化～ローマ・長崎　信仰の証～」長崎歴史文化博物館編集・発行
- 図録「鄭成功生誕400周年記念事業　鄭成功とアジアの海」松浦史料博物館・平戸オランダ商館制作
- 「かくれキリシタンとは何か～オラショを巡る旅」中園成生著（弦書房）
- 「南島原歴史遺産　原城跡、日野江城跡、吉利支丹墓碑を中心にキリシタン史跡をたずねて」南島原市企画・発行
- 「世界遺産　キリシタンの里～長崎・天草の信仰史をたずねる～」本馬貞夫著（九州大学出版会）
- 「ザビエルからはじまった日本の教会の歴史」結城了悟著（女子パウロ会）
- 「長崎歴史100人事典」長崎文献社著・発行
- 「天草四郎と島原の乱」鶴田倉造著（熊本出版文化会館）
- 「長崎奉行の歴史　苦悩する官僚エリート」木村直樹著（KADOKAWA）
- 「五島市の教会　ポケットガイド」五島市世界遺産登録推進協議会発行
- 「五島キリシタン史　伝来と信仰のあゆみ」五島市世界遺産登録推進協議会発行
- 「久賀島キリシタン検挙事件　牢屋の瘴のキリストの証し人」久賀島潜伏キリシタン資料館
- 「旅する長崎学6　キリシタン文化　別冊　総集編　キリシタン文化の旅　長崎へのいざない」長崎文献社企画・発行
- 長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産公式ホームページ
- 黒島観光協会ホームページ
- 林水産ホームページ
- 新上五島町観光物産協会ホームページ
- ながさき旅ネット
- 長崎伝統芸能振興会ホームページ
- 五島市観光サイト　五島の島たび
- おちか島旅
- 長崎市ナガジン
- 平戸チャンネル
- 出島公式ホームページ
- 九州オルレホームページ

協力

- | | |
|-----------------|-----------------|
| ●カトリック長崎大司教区 | ●元祖　具雑煮　姫松屋 |
| ●松浦史料博物館 | ●南島原市地域振興部商工観光課 |
| ●平戸市生月町博物館・島の館 | ●長崎市外海歴史民俗資料館 |
| ●春日集落案内所かたりな | ●長崎市文化観光部　文化財課 |
| ●林水産 | ●出津農楽舎 |
| ●長崎歴史文化博物館 | ●旧出津救助院 |
| ●大浦天主堂　キリシタン博物館 | ●長崎市ド・ロ神父記念館 |
| ●長崎県美術館 | ●五島観光歴史資料館 |
| ●国指定史跡　出島和蘭商館跡 | ●堂崎天主堂キリシタン資料館 |
| ●有馬キリシタン遺産記念館 | ●久賀島観光交流拠点センター |
| ●南島原冬のお祭り実行委員会 | ●久賀島潜伏キリシタン資料館 |
| | （順不同） |



ONE

ようこそ、長崎のミュージアムへ

ANSWER

博物館・美術館ガイドブック

2025年3月1日発行



世界文化遺産
長崎と天草地方の
潜伏キリシタン関連遺産
公式サイト

※教会堂見学は事前連絡が必要です(大浦天主堂を除く)。見学の際にはマナーを守り、厳肅な雰囲気の中で心静かに過ごしてください。

●企画・発行

長崎県文化振興・世界遺産課
(編集担当／長崎県文化観光連携
コーディネーター 花田佐奈美)
〒850-8570 長崎県長崎市尾上町3-1
TEL.095-895-2768

令和6年度 文化庁
文化観光拠点施設を中核とした
地域における文化観光推進事業

●制作・販売

(株)イズワークス
〒850-0853
長崎県長崎市浜町3-23 浜せんビル4F
TEL.095-827-8960
FAX.095-827-8961

●撮影 松村琢磨／山頭範之

●定価 1,650円(税込)

●印刷 (株)インテックス

※本誌に掲載している内容におきましては、2025年1月現在までの情報です。開館時間・入館料など変更になる場合がありますので、あらかじめご了承ください。
※本誌掲載の記事、写真、イラスト、図表等の無断複写(コピー)、複製、転載を固く禁じます。
※万一、落丁、乱丁がございましたら、販売元にご連絡くださるよう、お願いいたします。

旅する長崎学
ガイドブック
公式サイト



文化庁



世界文化遺産
長崎と天草地方の
潜伏キリシタン関連遺産